
仮面ライダーオーズ/OOO f e a t . D O G D A Y S 姫と勇者と赤き不死鳥

FOX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ／OOO feat. DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

【Nコード】

N2950Y

【作者名】

FOX

【あらすじ】

仮面ライダーオーズ、火野映司が相棒のアンクと共に、真木博士による“世界の終末”を阻止してから半年あまり。映司はいなくなったアンクと再開できる事を信じ、旅を続けていた。

時は流れ3月の中旬、映司はかつての仲間とお花見をするため一足速く日本に帰国し旅をしながら夢見町を目指していた。そしてその旅の途中、ある町に訪れた際ある少年と出会う。この出会いが映司の新たな戦いと旅が幕を上げる。

誘いと帰国と落とし穴（前書き）

初投稿になりますFOXと言います。

初めてなので温かい目で見ていただくと幸いです。

話はオーズ最終回の後からですが、この物語は、仮面ライダー×
仮面ライダー フォーゼ&オーズ MOVIE大戦MEGA M
AXの物語を無視しています。ご了承下さい。

誘いと帰国と落とし穴

かつてある戦いがあった。

その戦いは世界の終焉を望む一人の科学者、真木清人が起こしたものであった。

しかしそれを阻止した青年がいた。

青年の名は火野映司。

火野映司はこの戦いの中で相棒であり、欲望の怪人グリードであるアंकを失った。

しかしアंकは最後、満足していた。満たされることが無い自分が死ぬとこまでこれたということに。

この戦いの後、火野映司は止まっていた旅を再開した。その手には2つに割れたタカのコアメダルがあった。映司は再び相棒であるアंकに会えることを信じ、今日も明日のパンツを持って旅を続ける……。

— — — — —

3月中旬、日本、紀乃川市。現在、火野映司はこの町にいた。本来ならまだ海外にいたはずだが、とある理由により日本に戻ってきていた。

その理由は今から約数日前までさかのぼる・・・。

・
・
・
・

「お花見ですか？」

『そうよ！映司君、たまにはみんなでパーツとやりましょうよ！』

映司は画面中にいる女性に花見に行かないか？という誘いを受けていた。

この女性の名前は白石知世子。多国籍料理店クスクシエの店長であり、以前映司が日本にいたときにお世話になっていた。現在も日本に帰った時はお世話になっている。

ちなみに画面の中いる理由は、これがテレビ電話だからである。映司はこのテレビ電話を定期的に利用し連絡を取り合っている。

「いいですよ。やりましょうよお花見。」

『じゃあ決まりね！日時は後でメールで送るから！』

「わかりました。ちなみに参加者は？」

『参加者は、私に後藤さんに伊達さん。あと里中さんと鴻上会長も。あ！あとちゃんと比奈ちゃんと信吾さんも来るわよ！』

「そうですか。わかりました。じゃあまたお花見の時に。」

『待ってるわよ。』

・
・
・
・

というやりとりがあったのだ。

ちなみに映司はメールで送られてきた日時より早く帰ってきていた。

本来なら花見の日の前日でも良かったのだが、映司はあえて10日以上早くきて、旅をしながら向かうのもいいだろうと考え今にいたる。

「結構いいとこだよな〜ここ。」

映司は歩きながらこの町の感想を言っていた。

「ん？、あれは・・・中学校かな？」

映司は左手に見えた建物を見てそう言った。

「今の時期だと、ちょうど3学期の終了式あたりかな？」

そんな予想しながら映司は中学校の校門の前まで来た。今時間帯だからか、校庭には誰もいない。その隣にある体育館らしき建物からマイクを使って喋っている人の声が聞こえる。

どうやら映司の予想が当たったようだ。

「本当に終了式やってるんだ・・・ん？。」

その時、映司は校舎の屋上を歩く少年を目撃した。屋上といっても2階ほどの高さの場所である。その少年は馴れているのか、足どりは軽い。外見は遠くからではわかりにくいだが、金髪であることはわかった。

「馴れているんだろうな。足どりが軽いし。」

映司はしばらくその少年を見ていたが、ふと視界にあるものが映った。

「あれ・・・犬だ。なんであんな所に？あの子をまってるのかな？あれ・・・剣をくわえてる！？」

普通、剣をくわえた犬などいるだろうか？映司は考えていると、遂に少年が屋上の縁に来た。

「・・・嫌な予感がする。」

映司はそう言うと、校門を乗り越え、剣をくわえている犬に近づく。

慎重に近づき、犬まであと数十メートルの所になった時、少年が華麗に屋上から飛び降りた。

次の瞬間、犬はくわえていた剣を地面に突き刺した。剣が地面に突き刺さると、ピンク色の魔法陣のようなものが現れ、その中心に穴が現れた。

「危ない！」

映司は身を隠していた花壇から飛び出した。穴の位置は少年が飛び降りた時、ちょうど着地する場所にできていた。そのため少年は吸

いこまれるようにして穴に向かって落ちていった。

「間に合えー！ー！」

映司は穴のある場所に向かって飛び込み穴の中に手を伸ばした。
そして・・・

・
・
・
・
・

「なんとか・・・間に合った・・・。」

映司の手はしっかりと少年の手を掴んでいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

「あ・・・ありがとうございます！」

少年は穴ができた事に驚いていたが、さらに映司に助けられた事にも驚いていたようだ。

映司は少年を引き上げようとする。が・・・

ドス！

「へえ？」

何かがぶつかってきた。
そして・・・。

「「!?!?、うあー!」」

映司と少年は一緒に穴に落ちていった。映司はその時、自分達が落ちた後穴が閉じる瞬間先ほどの剣をくわえた犬が飛び込んできたのを見た。

おそらく先ほどの音はあの犬が自分の背中に突進した音だったのだろうと映司は思った。

そのまま2人と1匹は穴の中に消えていった。

決断と空間と3つの光（前書き）

第2話です。

書くの難しい・・・。

決断と空間と3つの光

ここは、異世界フロニヤルドにあるビスコッティ共和国。

フロニヤルドには、地球の人々とは違い動物の耳や尻尾を持った人々が生活している。

このビスコッティ共和国には犬耳や犬の尻尾を持つ人々が暮らしている。

そのビスコッティ共和国の中にあるフィリアンノ領。その中にフィリアンノ城は存在する。

現在は夜。このフィリアンノ城の一室である会議が行われていた。

その部屋には重苦しい空気が流れている。

「やはりガレット獅子団は、ミオン砦に攻めて来るようですね。」

1人の男性が発言した。

すると今度は緑色の髪を持つ少女が発言する。

「ガレットは本気でこの城まで侵攻してくるのでしょうか？」

「ガレット獅子団のレオンミシェル閣下は勇猛な方じゃが、かような無茶をされる方だったかのう。」

「理由はどうあれ、この最近の戦はひたすら負け戦じゃ。」

「せめて、ダルキアン卿やテンコ様が居てくれたらのう……。」「

3人の老人は口々に言う。

この老人達が言っているように、現在ビスコッティ共和国は隣国であるガレット獅子団と戦をしているのだが、こここのところ敗北が続き後が無くなっているのだ。

「騎士ブリオッシュやユキカゼにも使命がありますれば。」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪、このフィリアンノ城まで……。」「

「させません！」

老人の1人が不安げに言うと、緑色の髪の少女が叫びながら立った。

「姫様の為にも！ビスコッティの民の為にも！この戦我々が！」

「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ。」

「あ……。失礼しました。」

栗色の髪の少女が緑色の髪の少女を静めた。そして緑色の髪の少女は席につく。

すると……。

「ありがとう、みんな。我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今度は本当に負けることはできない戦いです。ですから・・最後の切り札を使おうと思います。」

ピンク色の髪の少女の発言にその場にいた者全員がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召喚します！」

ピンク色の髪の少女、ミルヒオーレは力強く発言した。

しかしこの時、彼女は気づいていなかった。この勇者召還をしたが為に、何の関係の無い人を巻き込んでしまうことに・・・。

――――

場所は変わって、日本、紀乃川市にあるとある学校。

現在この学校は終了式の真っ最中である。

1人の教師が体育館に向かっていている途中、ある生徒とすれ違う。

「ん？、おいイズミ、どうした？」

教師がそう言うと、イズミと言われた生徒が振り返る。

「ちょっと飛行機があるので！」

「そうか。気をつけていけよ。」

「はい！」

そしてイズミと言われた生徒は教室に戻っていった。

彼の名はシンク・イズミ。

この学校に在学するアスレチックスが大好きな少年である。

教室に戻ってきたシンクは、帰り支度を済ませ教室の窓を開けた。開いた窓からは良い風が入ってくる。

そのままシンクは窓の外に出た。屋根の縁を歩き、教師用の玄関の屋上まで歩いて行く。

ちなみにシンクが何故速く帰るのかは、彼の実家にある。彼の実家はイギリスのコーンウェルにあるのだ。シンクは春休みを実家で過ごす為、速めに自宅に帰り、支度をしなければならいのだ。

そうこうしているうちに屋上の縁に来る。

「よっと！」シンクは華麗に飛び上がった。そのまま綺麗に着地と思われた。が・・・

「てえ？、えーーーーー！」

シンクは驚愕した。

何故なら、自分の着地する場所に穴が開いていたのだから。

「うぁー！ー！ー！」

シンクはそのまま穴に向かって落ちていく。落ちる・・・そう思った時だった。

パシ！

何かがシンクの手を掴んだ。

シンクは下を見た。下には何とも言えない空間が広がっている。そして、上を見た。そこには・・・自分の手を掴んでいる・・・青年がいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

青年はそう言った。

「あ・・・ありがとうございます！」

（助かった・・・。）

シンクは安心した。そして引き上げられ始める。しかし・・・

ドス！

何かが何かにぶつかった音がした。

(何だろう?)

そう思った矢先。なんと青年が落ちてきた。

「「!?!?。うぁー!?!?!?!」」

シンクは青年と一緒に叫んだ。

(一体何が起こったんだ!?!?)

シンクは思った。しかしそれはすぐ解消された。

穴が閉じる瞬間、犬が1匹飛び込んで来たのだ。

(まさか・・・あの犬が!?!?)

おそらく、自分を引き上げようとした青年を押したのだろう。そしてさっきの音は犬が青年を押した音だったのだろう。

そのまま、シンクと青年と犬は不思議な空間の中に消えていった。

—
—
—
—
—
—

あれからどれくらい時間が過ぎただろう……。映司はぼんやりと

考える。

あの穴に落ちてからというものの、映司はずっとこの不思議な空間をさまよっていた。

助けようとした少年と剣をくわえた犬は落ちている途中にはぐれてしまい、どこにいるか分からない。

「はあ・・・これからどうしよう・・・。」

映司はポツリと呟いた。

とりあえず辺りを見渡してみる。

しかし、何も無い。本当に何も無い。

「困ったな・・・。」

映司はどうすればここから脱出できるか考え始めた。

・ ・ ・ ・ ・

「駄目だ・・・何も浮かばない。」

映司はため息をついてしまう。

「こんな時にアंकが居てくれたら・・・。」

映司はポケットから割れたタカのコアメダルを取り出す。
アंकならこんな時どうするか。考えてみたが・・・。

「はぁ・・・。」

しかし、出るのはため息だけだった。

その時。

「ん？何だろ・・・この感じ？」

映司は何かを感じ取った。

「懐かしい・・・。」

懐かしい・・・。とても懐かしい感じがした。

映司はその懐かしさを探し始める。辺りを見渡す。

「・・・あれは？」

映司の先には・・・赤く光る3つの物体があった。映司はそれに手を伸ばす。

「あと・・・もうちょっと・・・。」

映司は必死に手を伸ばした。

そして、遂にその3つの光を掴んだ。

次の瞬間、映司は真っ赤な光に包まれる。

そしてそのまま、映司を包んだ光はどこかに飛び去っていった。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ（前書き）

第3話です。

今回はビスコッティ側の話になります。
映司が登場するのは次回あたりになります。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ

現在ビスコッティ共和国は、歓喜の渦に包まれていた。

何故か？、それは隣国であるガレット獅子団との戦に勝利したからである。

ビスコッティはここ最近、ガレットとの戦で負け続け、後が無くなるという事態になった。

この現状を重く見たビスコッティ共和国代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティはこの現状を打開すべく、最後の切り札である勇者召喚を使用したのだ。

そうしてビスコッティに呼ばれた勇者、名はシンク・イズミ。

勇者シンクの活躍は目覚ましく、一般兵を倒しまくりポイントを量産。更にはビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジとの連携によりガレットの代表領主、レオンミシエル閣下を撃破するなどの活躍ぶりであった。

しかしある事態が起こった。

勇者シンクとミルヒオーレは、なんと勇者召喚した勇者は帰還することが出来ないことを知らなかったのである。

その事実にはショックを受けるシンク。

この事態に責任を感じたビスコッティ王立学術研究院主席、リコッ

タ・エルマールは学術研究院生と共に勇者を帰還させる方法の調査を始めるのであった。しかし結局見つからず。

そしてシンクは、その問題はひとまず置いて別の用件をリコッタに頼のだった。

――――

ここはフィリアンノ城から少し離れた浮島の1つ。

この浮島に3つの人影があった。ビスコッティ騎士団親衛隊隊長のエクレール・マルティノッジ。

ビスコッティ王立学術研究院主席のリコッタ・エルマール。

そしてビスコッティが召喚した勇者、シンク・イズミ。
の3人である

彼らは現在、浮島にある召喚台にいた。

「くう……。うあ！」

「だから言っただろ。帰れないって。」

シンクはピンク色の魔法陣に手をつ込み何とか帰ろうとしたのだが、手は弾かれてしまう。

エクレールは短剣をかざしながらそれをため息混じりに見ていた。

「うう・・・やっぱり駄目なのか・・・。」

「だから何度も言っているだろう。」

シンクは心が折れそうになる。
すると・・・。

「勇者様ー、準備できました！」

後ろからリコッタの元気な声が聞こえ、シンクとエクレールはリコッタがいる周波増幅器のところへ。

シンクは帰れないならせめて連絡をさせてくれといい、召喚台で携帯を使えばつながるのでは？と考え今にいたる。

そして電波を出すために使われるのが、この周波増幅器である。

ちなみにこの周波増幅器はリコッタが5才の時に発明したらしく、今ではフロニャルド全域で使われているらしい。

「それじゃお願い。」

「了解であります！」

シンクの合図でリコッタは周波増幅器のスイッチをいれる。

シンクは携帯を開きアンテナが立つか見る。

「・・・あ！立った！」

その声にリコッタが近寄ってくる。

「何がでありますか？」

「ほら、携帯のアンテナ！」

シンクは携帯の画面に表示されているアンテナを見せる。

「よし！じゃ早速・・・。」

シンクはアンテナが復活した携帯を使い、地球にいるレベツカや家族・親戚に連絡をとり始めたのだった。

シンクが家族や親戚と連絡をとりあっている時、エクレールは今回の戦を思い返していた。

（今回は勇者のおかげで勝つことができた。しかしあれは・・・止めよう。考えただけで恥ずかしい。）

エクレールは今回の戦で物凄く恥ずかしい思いをしていた。

ちなみに、エクレールが恥ずかしい思いをしてしまったのはシンクのせいである。

（・・・この後に、もし再びガレットと戦があったら・・・我々はまた勝てるだろうか・・・。）

エクレールがそんな事を考えていると・・・。

「ん？、なんだ・・・あれは？」

空をひらひらと舞っている変な物を見つけた。

今エクレールは暇なので、その空を舞っている物を目で追う。

そして・・・悲劇は起こった。

ポフ。

エクレールの顔になにかが被さった。

「!?!。な、なんだ一体!?!」

急いで顔に被さったもの取る。

被さってきたものにエクレールは戦慄した。

それは・・・

「お、男のパンツだと!?! しかも蝶柄!?! 何故こんな物が!?!」

エクレールは素っ頓狂な声を上げる。しかしすぐに黙り込む。

シンクは電話に集中している為か気づいておらず。リコッタはシンクの携帯に夢中である。

(よ、よかった・・・気づかれていない。・・・しかし、何でこんな物が空から降ってくるんだ?)

エクレールは、パンツが降ってきた空を見上げた。だが何故パンツが落ちてきたのかはさっぱり分からなかった。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ（前書き）

第4話です。

今回は映司メインになります。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ

ここは、地球と異世界であるフロニヤルドの間にある不思議な空間。

この不思議な空間を突き進む赤い光があった。

「一体どこに向かっていているんだろう……。」

赤い光の中で火野映司は、今どこに向かっていているか考えている。

しばらく進んでいると、視線の先に光が漏れ出している所を見つける。

「もしかして……あそこに向かっていているのかな？」

映司は今、自分が向かっている場所がその光が漏れ出している場所ではないかと予想する。

最初こそ小さい光だったが、進むにつれだんだん大きくなっていく。映司の予想は確信に変わる。

「やっぱり光に向かってる。あそこが出口なのかな？」

光が出口ではないか？ 映司は心の片隅で期待を膨らませる。ようやくここから出られると。

そして、映司は光の中へと消えていった。

光に突入し、映司は不思議な空間から脱出する。
次の瞬間、目にした光景に映司は我が目を疑った。

「てえ・・・嘘!？」

何故なら・・・

そこは大空だったのだから。

見渡せばそこには雲があり、下を見れば大地が見える。

つまり、映司は大空に放り出されたのだ。当然パラシュートは着けていない。勿論、生身の人間は飛行機などに乗らない限り飛ぶ事など出来ない。

今の映司は丸腰。つまりどうなるか？

「うぁーーーーー!」

映司は落下を始めた。

もう落ちるのは本日2回目である。

「い、こんなの聞いてなーーーーい!」

映司は某探偵事務所の女所長のようなセリフを叫ぶ。しかしその叫

びは虚しく大空に消える。

更に映司を追い討ちするかのごとく、悲劇が襲う。

「あーーーー！明日のパンツがあーーーーー！」

ポケットに入れておいたパンツが、ポケットから出てしまったのだ。しかもそれは、映司お気に入り蝶柄パンツである。

そのまま蝶柄パンツはひらひら舞ながら、映司は反対方向に行ってしまった。

「そ、そんな……。俺の……。明日が……。」

映司はとてつもない絶望感に襲われる。

そのまま映司は大地向かって落ちていく。その先に、ある一国の象徴である城があることを知らずに……。

――――

ここは、フィリアンノ城にあるビスコッティ王立学術研究院。

現在研究院では、『召還した勇者の帰還方法』の調査の真っ最中である。

ビスコッティ周辺では、基本的に召還された勇者は元の世界に帰れないとされているのが一般的な考えである。

なのだが、ビスコッティの代表領主であり勇者を召還したミルヒオ
ーレ姫と勇者シンクはこのことを知らなかった。

このことに責任を感じた王立学術研究院主席のリコッタは帰還方法
の調査を名乗り出てたのだ。
そして現在にいたる。

ちなみに今、主席でありこの調査の責任者のリコッタは勇者シンク
と別の用件で留守になっている。

だが、主席であるリコッタがいない中でも学院生が調査を続けてい
るのだ。

「なかなか見つからないな・・・。」

学院生の1人が呟く。

「でも絶対見つけるぞ!」

学院生は気合いを入れ直す。

それから数分後。

「ねえーみんな。そろそろ休憩しない?」

違う学院生が他の学院生に呼びかける。

「そうだね。さっきから本棚に向かいっぱなしだしね。」

「喉乾いた〜。」

「主席はいつ戻られるんだろう・・・。」

学院生たちが口々に眩き、休憩しようと中央のロビーに向かおうとした。

その時・・・

ズドーーーーーン！！

何かが学院の屋根をぶち破って落下してきた。

辺りに煙りが充満する。

「な、なんだ！？」

「え！？一体なに！？」

「ゲホ、ゲホ。煙りが・・・。」

「うう・・・目が開けられない・・・。」

この事態に驚く学院生達。中には砂煙りを吸い咳き込む者や、目に砂埃入り目が開けられない者もいた。

「一体なに事だ！？」

扉が開きこの事態に気づいた数人の親衛隊の騎士が駆けつけてくる。

「どうした！？一体なにがあった！？」

騎士の1人が学院生に訪ねる。

「わ、分かりません。何かが学院の屋根を壊しも「おい！あれは何だ！」」

学院生が事情の説明を始めようとした時、別の騎士の1人が声をあげた。

そこは中央のロビーだった。

そして、ここにいる者全員が中央のロビーに注目した。

「なんだ・・・あれは？」

騎士の1人が呟いた。

そこには・・・

赤く光る物体があった。

騎士達は細心の注意をはらい、その物体に近く。

すると突然、物体を纏っていた赤い光がまるで鳥の翼のように開いた。

翼のように開いた赤いた光は、そのまま羽になり辺りに散らばる。

「うあゝ。綺麗。」

学院生の1人が呟く。

「一体何が……。」

騎士の1人が言った。騎士は落ちてきた羽を手にもせるが、羽は光となって消えた。誰もがその光景に見とれていると……

ドス！

辺りに鈍い音が響いた。

今の音で我にかえった騎士達は剣を持ち、光があった所に向かって構える。

そこにいたのは……

「痛ててえ……ん？」

不思議な格好をした……青年だった。

――――

火野映司は現状を掴めずにいた。

不思議な空間から抜け出したと思ったら空中で、更に落下途中に明日のパンツを無くしてしまい散々な目にあった。

それがどうだろう。今は甲冑を着た男達に囲まれているではないか。おまけに剣が向けられている。

「あ、あのゝ．．．。」

「動くな！」

映司は立ち上がり、とりあえず目の前の男に話しかけるが、見事にスルー。更には動くなと言われた。

「貴様、何者だ！何が目的だ！答えろ！」

「い、いや．．．何者と言われても．．．。特に目的とかは無いし．．．。」

男の質問に答える映司。何者かと言われてもなんと答えたらいいかわからない。目的も特に無い。映司は正直に答えるが．．．。

「嘘をつくな！目的も無しに屋根をぶち破って空から落ちてくるやつが何処にいる！」

（いや．．．ここにいるけど。）

映司は思った。

（ん？さてよ？今この人は何て言った？空から落ちてきた？）

映司はそう言われやっとな自分の現状が分かった。

おそらく、自分はパンツを無くした後この建物に落下してきたのだろう。

だがそこで疑問が。

（だとしたら、何で俺無傷なんだ？）

今自分は無傷である。普通あの高さから落ちたらひとたまりもないはずだ。

「いいから答えろ！一体貴様は何なんだ！突然赤い光を纏って落下してきて！」

さっきとは別の男の質問。

（赤い光？俺はそれのおかげで無傷だったのか？なるほど・・・納得。）

心の中で1人納得する。

ただし男達のイライラは高まる。

「早く答えろ！」

痺れを切らした男が剣を映司に向けて叫ぶ。

（まずいな・・・どうしよう。何か良い策は・・・。）

映司は思考をフル回転させる。その間にも男は剣を持って迫ってくる。

(・・・やってみるかな。)

映司は賭けに出た。

「・・・う！お腹が・・・急に。」

「！？、おい大丈夫か？」

映司は突然腹を押さえ痛みがri始めた。

すると、突然の腹痛を心配したのか、さっきの男が近寄ってきた。

(・・・今だ！)

映司はとっさに立ち上がり、男に突進する。

「ぐほお！」

男は不意を突かれ、映司の突進を受けて倒れてしまう。

「ごめんなさい！」

映司は突進した相手に謝罪しながら扉に向かって走った。

「まて！」

何人かの男達が後を追うが、甲冑を着ているため、走りにくい。その分映司は身軽な為速く走れる。男達は映司の逃走を許してしまう。

「くそ！逃がした！」

「さて。ここは一度引こう。」

「何を言っている！やつは……。」

「今この装備では追いつくのは無理だ。それに人数も足りない。」

「うっ……確かに。」

映司を追いかけてようとした男を別の男がなだめる。

「一旦騎士団詰め所に戻るぞ！そしてロラン騎士団長に報告だ！」

男達はこれからの方針を固め、学院を後にする。

「あ、学院生の皆さんは非難しておいて下さい。念のために。」

最後の1人が学院生にそう告げ学院を後にした。

火野映司とビスコッティ騎士団、両者による追いかけてっことが今始まろうとしていた。

疑惑と逃走と初変身（前書き）

第5話です。

最後はなんかグダグダに・・・
終わり方も中途半端です。

疑惑と逃走と初変身

「よし。連絡完了っと。」

家族や親戚、知り合いなどの連絡が完了し携帯を閉じて一息つくシ
ンク。

だがここでシンクは、背後から強烈な視線を感じた。

振り向くとそこには、目を輝かせている・・・リコッタがいた。

「えっと・・・何？」

「いや・・・勇者様の持っているその携帯、というのを調べさせて
欲しいでありますよ。」

どうやらシンクの携帯が気になるようだ。

「まあ、良いけど・・・どうやって？」

「大丈夫であります！ちよつと分解して中の構造を見るだけであり
ますから！」

「ぶ、分解！？じよ、冗談じゃないよ！？この世界、保険適用され
ないんだから！」

「大丈夫でありますよ。このリコッタ・エルマールが保証するの
でありますから！さあ！」

「ちょ!?! まって! 止めてよ!」

「ふっふっふゝ無駄でありますゝ。自分は未知の機械を見るとすごく調べたくなるでありますから!」

シンクとリコッタが携帯を巡って騒いでいる中、エクレールはそれを呆れたように見ていた。

「全く・・・リコはともかく、勇者は子供か?」

「ちょっ! そんな事言わないで助けてよ!」

シンクはエクレールに助けてを求める。

「まあなんだ・・・頑張れ。」

「見捨てられたーーーー!」

シンクの叫びがこだまする。

するとリコッタが・・・

「ところでエクレ、その右手に持っている布はなんですか?」

「ん?、あゝこれか。これは・・・はあ!」

とっさに右手を後ろに回し布を隠すエクレール。

「ん? エクレ、今何隠したの?」

「な、何だ勇者！お前のき、気にする物じゃな、ないぞ！」

「エクレ、明らかに動揺してない？」

「ど、動揺などしていない！」

「いや、してるでしょ。」

「してない！」

「いやだって……。」

「してないものはしと「取ったであります！」ああー！ー！ー！
！」

エクレールがまるで、この世が終わりとばかりに叫ぶ。

リコッタはエクレールから奪った布をシンクに持って行く。

「はい♪勇者様♪」

リコッタに布を渡されるシンク。

「ありがとう。さてこの布の正体はと……え？」

「こ、これは！」

シンクとリコッタが驚愕の声を上げる中、エクレールはその場に体育座りをした。顔はうつむいている。

「これ・・・男性用の下着だね。しかも下半身の。」

「エクレは・・・男性下着を集めるのが趣味だったでありますか！？」

するとエクレール。顔をばあ！と上げ一言。

「そんなわけ無いだろ！！誰が男の下着など集めるか！！！！！！」

「いや・・・だって・・・。」

「実際ここにあるでありますよ？」

シンクとエクレールは呟く。

「違う！それは空から降ってきたんだ！」

「・・・エクレ正直にはこう・・・楽になるよ。」

「そうでありますよエクレ。例えばエクレにそんな趣味が合っても・・・自分はエクレの味方でありますよ。」

シンクとリコッタはエクレールに正直になれと促す。

「違うんだ・・・それは空から・・・。」

エクレールは今にも泣きそうな感じになる。
すると・・・

トゥルルル。

電話の着信音のような音が鳴る。

エクレールは周波増幅器に付いている受話器を取る。

「はいっ。こちらエクレール。」

さっきの表情が嘘のように消え、いつもの表情に戻る。

『エクレか？私だ。』

「兄上？どうかなされましたか？」

『ああ。重要な要件だ。』

重要な要件という単語に反応したエクレールは表情を引き締める。

「それで、要件とは？」

『ああ。すぐに勇者殿と主席を連れて騎士団詰め所に戻ってきてくれ。大至急だ。』

「何かあったのですか？」

すぐに戻ってきて欲しいと言われ、何か起こったと推測するエクレール

『そうだ。緊急事態だ。フィリアンノ城に侵入者が現れた。』

「侵入者！？」

侵入者と言われ驚くエクレール。

『数分前に学院の屋根を壊して侵入したようだ。幸い怪我人はいなかったが、今騎士団詰め所に捜査本部を設置して、捜索にあたっている。すぐに戻ってきて捜索に合流して欲しいのだ。』

「分かりました。すぐに戻ります。」

『頼んだぞ。』

「はっ！」

そうして受話器を置いた。

「エクレ……。」

シンクがエクレールを呼ぶ。

「何だ？」

エクレールも振り向く。そこにはさっきとは違い真面目な表情のシンクとリコッタがいた。

エクレールはシンク達に状況を説明する。

シンクとリコッタは侵入者の存在に驚く。

そして侵入者が学院の屋根を壊したと話すと、

「学院の屋根を！？みんなは無事なのでありますか！？」

「ああ。幸い怪我人はいなかったらしい。」

「よ、よかった・・・であります。」

やはりリコッタは学院の話をすると、他の学院生の安否をきづかった。

「だとすると、急いで戻らないと。」

「当然だ。」

「もちろんであります!」

こうして3人は急いで騎士団詰め所へと戻っていった。

――
――
――
――
――

「待て! 逃げるな!」

「観念しろ! 侵入者!」

ここは、フィリアンノ城の中。今ここでは壮絶な追いかけっこが行われていた。

「あゝもう! しつこいな!」

武装した騎士達から逃げる映司はうんざりしていた。

かれこれもう数十分こうして追われている。

（何とかして振り切らないと・・・。）

映司は走りながら、追っ手を振り切る方法を考える。

すると目の前に、通路が右、真っ直ぐ、左に別れている。

（どうしよう。どれに行けば・・・）

映司は迷うが、

（ん？あれは・・・よしこれでいこう。）

映司は右に曲がる。

「右か！」

「逃がさん！」

騎士達も映司を追い右に曲がる。が・・・

「何、どこに消えた！？」

そこに映司の姿はなかった。

「とりあえずこの先に進もう。」

「そうだな。今度会ったら絶対捕まえる！」

騎士達はそう呟き、そこから立ち去って行った。

すると・・・

ガタ、

「ふう、何とかやり過ぎたかな。」

置いてあった樽から映司が出てきた。

実はあの時、右の通路に樽を見つけた映司は、賭けで右に曲がり樽の中に入ったのだ。

「でも、樽の蓋開いててよかった。」

正直開いてなかったら捕まっていただろうと考える。

「とりあえず移動しよう。」

映司は再び移動を始めた。

場所は変わり、騎士団詰め所。現在ここは、侵入者捜査の拠点となっている。

そして今この侵入者捜査を指揮しているのは、ビスコッティ騎士団騎士団長ロラン・マルティノッジ、つまりエクレールの兄である。

「どうだ？ 侵入者はいたか？」

「駄目ですね。見つけたとしても振り切られてしまってます。」

「そうか……。」

どうやら侵入者はかなりのやり手のようであり、騎士達の追跡を交わし続けている。

「手強いな……。」

まさかここまで苦戦するとは思っていなかったため、ロランはまいつてしまっている。
すると、

コンコン。

ドアを叩く音した。

「良いぞ、入ってくれ。」

「失礼します。」

入って来たのはロラン待望の人物だった。

「エクレ、よく戻ってきた。早かったな。」

「はい。緊急事態ですから。」

入って来たのは妹のエクレールだった。実はあそこからかなり飛ば

してきたのだ。

「主席と勇者殿は？」

「リコは避難している学院生の元に、勇者はそれに付き添って行きました。」

「そうか……。分かった。」

「兄上、現状は？」

エクレールは今どのような状況か質問する。

「騎士達が搜索しているが……。思った以上に難航している。」

「分かりました。私も行きます。」

「頼んだぞ。エクレ。」

「了解。」

状況を把握したエクレールは映司搜索の為、ロランのいる部屋から出て行き、映司がいるフィリアンノ城に向かった。

場所は再びフィリアンノ城。

騎士達の搜索は今も続いている。

「はあ・・・何時まで続くんだろう・・・これ。」

映司はため息をつく。

はつきり言ってもう止めにしてほしい位である。

映司は追っ手から次々と逃れ、通路を歩き続けている。止まれば見つかりやすくなる。そう思い映司は歩き続ける。すると開けた場所にでた。そこは庭園のような場所だった。

「うあゝ綺麗だな・・・。」

その庭園はとても整備されており、花も綺麗に咲き誇っている。噴水もあり水が絶え間なく出ている。

この光景は、明日のパンツを失った映司の心を癒やしていった。

が、それは長くは続かなかった。

「見つけたぞ！お前が侵入者だな？」

映司は思わず振り返った。先ほどまで自分を搜索していたのは男のはずだ。

なのに今聞こえたのは男の声ではなかった。

「お、女の子？」

「女の子で何が悪い。」

そう、女の子だ。

緑色の髪的少女だ。

映司は緑色の髪の少女、エクレールの出現に動揺する。

「何で女の子が・・・」

「それは、私も騎士だからだ。今の私の任務は侵入者であるお前を拘束することにある。多少の損傷はしょうがないが、ここでお前を捕まえる！」

エクレールは背中の中の鞘から2本の短剣を取り出す。右手で普通に持ち、左手は逆手持ちにする。

「・・・行くぞ！」

エクレールはそのまま映司に向かって走り切りかかる。

映司はそれをギリギリで回避する。

エクレールはすぐさま次の動作に入り、映司を追撃する。

映司は追撃を受けるも、それもかろうじて回避する。

「ちょこまかと！」

エクレールは更に攻撃を仕掛ける。

映司はそれさえもよける。

（く・・・早く何とかしないと！）

焦る映司をよそに、エクレールの攻撃は止まらない。

「ぐあ！」

エクレールの剣による攻撃をよけ続けた映司だが、ついに不意打ちの蹴りをくらいい、後ろに転がりながら倒れる。その時、映司のポケットから何か飛び出したが2人は気づかない。

「・・・観念しろ。」

エクレールが剣を構えながら近づいてくる。

（くそ・・・どうすれば・・・。）

映司は後ずさりながら思考をフル回転させている時だった。

カチ。

何かが映司の右手に当たった。

本来なら石か何かだろうと思いきや、映司は右手に当たった物を手に取った。

それは・・・赤いメダルだった。

（これって・・・まさか・・・。）

映司はその後ろを見る。

そこには、自分の拾った赤いメダルと同じような赤いメダルが2枚落ちていた。

(・・・やるしかない。)

映司は早速行動に移した。

急いで後ろに向かって走り、残り2枚を回収し、エクレールと対峙する。

そして、映司は懷からオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。

オーズドライバーが腰に装着されると、映司はさっき回収した3枚の赤いメダルを左から1枚ずつ入れていく。

(こいつは一体何をしてるんだ?)

エクレールには何をしているかさっぱり分からない。

映司は全てのメダルを装填を終える。

そしてメダルが装填されている部分を斜めにし、オースキャナーを持つ。

辺りに電子音が響き渡る。

そしてオースキャナーを使い装填されたメダルをスキャンした。

「・・・変身!」

《タカ! クジャク! コンドル! タ~~~~ジャ~~~~ドル~~~~! ! ! ! !》

すると映司の身体の周り、頭、胴体、脚にそれぞれ5色（赤、青、黄、緑、灰）の動物が書かれた円形エフェクトが回転しながら現れる。

そして、その中赤い円形エフェクトに書かれているタカ、クジャク、コンドルが一つになり、映司に合わさる。

次の瞬間映司は一瞬にして赤を基調とした戦士に変わったのだった。

・ ・ ・ ・ ・

戦闘とけものだまと不完全な姿（前書き）

第6話です。

皆さんに質問なのですが、この作品のOPは、

オーズのAnything Goes!

DOG DAYSのScarlet Knight

どっちが良いと思いますか？

戦闘とけものだまと不完全な姿

フィリアンノ城内のある庭園。

ここに2人の人物が向かい合いながら対峙している。

1人はビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノツジ。

そしてもう1人は、全身に赤い鎧を身につけ、ちよっとのお金と明日のパンツさえあれば良いという旅人、火野映司。
またの名を・・・

仮面ライダーオーズ。

（姿が変わった？）

エクレールは表情には出していないが、心の中では驚いていた。

（変身とか言ってたな・・・まあ、奴がどんな姿になろうと私の目的は変わらない。）

エクレールは考えるのを止め、再び剣を構えた。

一方で、オーズのタジャドルコンボとなった映司は違和感を覚えていた。

（何だろ・・・この感じ。何時もと違う気がする・・・。）

何時もの違う。映司は思った。

何時もなら物凄い力が体の中に溜まってくる感じがしたが、今回はあまり感じなかった。

タジャドルコンボになったと言うよりも、この感じはタトバコンボに近かった。

「来ないのならこちらから行くぞ！」

痺れを切らしたエクレールが一気にオーズに近づく。

「てえ、うお！」

オーズは右に転がりこれを回避する。

エクレールは攻撃を回避されるが、すぐに体勢を立て直す。

「はあ！」

エクレールが再びオーズに攻撃を仕掛ける。

「くっ！」

オーズはこの攻撃を防ぐべく、左腕を前に突き出す。

すると、胸のオーラングルサークルが輝き、タジャスピナーが現れる。

タジャスピナーはオーズの左腕に装着され、そのままエクレールの剣による攻撃を防ぐ。

2本の短剣とタジャスピナーから火花が飛び散る。

「何っ！」

「せいやあ！」

オーズはエクレールを振り払う。

そのまま振り払ったエクレールにタジャスピナーから火炎弾を発射する。

エクレールは火炎弾をギリギリで回避する。

（何だ、あの盾は。突然現れて私の攻撃を防いだけじゃなく火炎弾も出せるのか！？）

エクレールはオーズの持つ盾、タジャスピナーに驚愕する。

（それだけじゃない。あの盾・・・かなりの強度だぞ！？それにあの火炎弾は紋章砲じゃない・・・一体何なんだ？）

エクレールは一度しかタジャスピナーに攻撃していないが、タジャスピナーには相当な強度があると直感した。

（だが・・・ここで私がやらねば！）

エクレールは未知の敵、オーズとの戦いに気を引き締めるのだった。

（危なかった・・・でもあの子、本気だ。こっちも気を引き締めないと。）

オーズはエクレールが本気で戦いにきているのに気づき、こちらも気を引き締める。

しばし沈黙が辺りを支配する。

「「はあ！」」

オーズとエクレールは、ほぼ同時に動いた。

エクレールは2本の短剣を駆使し攻撃する。

オーズはタジャスピナーを使い短剣による連続攻撃を防ぐ。

「でりゃ！」

「ぐがあ！」

タジャスピナーで連続攻撃を防いでいたオーズはコンドルレッグに装備された、ストライカーネイルを使い回し蹴りを放つ。

エクレールはもろにそれをくらってしまいダメージを受け、地面を転がる。

オーズはエクレールを追撃しようする。

だが、その時たまたま噴水の水に映った自分を見てオーズは・・・

「え・・・嘘！？どういう事！？」

驚いてしまった。

何故なら、

本来タジャドルコンボならタカヘッドはタカヘッド・ブレイブだが、現在の姿でのタカヘッドは普通の状態だった。

それだけではない。

胸にあるオーラングルサークルに描かれている図柄も違っていた。

本来なら不死鳥が描かれているはずだが、今のオーラングルサークルにはタカ、クジャク、コンドルが他のコンボ同様に別々に描かれていた。

「そんな・・・こんな事って・・・。」

まさかの姿に困惑するオーズ。

「隙あり！」

「ぐああ！」

困惑するオーズをエクレールは見逃すはずはない。そのままオーズに攻撃した。

オーズは2本の短剣による斬撃をタジャスピナーでガードすることができず、斬撃を浴び、膝を地につけてしまう。

「トドメだ！」

エクレールが再びオーズに攻撃を仕掛ける。

「こんな所で・・・やられてたまるかーーーーー！」

「!?!」

オーズはタジャスピナーを構え、火炎弾ではなく火炎放射を放つ。

エクレールは突然の火炎放射に怯み、後退する。

「まだ動けたのか・・・。」

「こんな所でやられたら、仲間との約束が果たせないからね。負けるわけにはいかない！」

「仲間との・・・約束？」

エクレールはオーズの言い放った、“仲間との約束”という言葉に反応する。

「まて、それh「隊長！ご無事で！？」なあ！お前達！？」

“仲間との約束”の意味を聞き出そうとしたエクレールだが、運悪く騎士達の増援がやって来る。

「隊長、後は我々に任せて下さい！「まて、今は・・・」全員突撃！」

エクレールは騎士達を制止させようとするが、騎士の1人であるエミリオの指示で騎士達はオーズに攻撃を開始する。

「増援か！こんな時に！」

オーズは増援の騎士達と戦闘を始める。

次々と攻撃を仕掛けてくる騎士達。

オーズはタジャスピナーとストライカーネイルを駆使し、これに対処する。

「あゝもう！しつこい！」

オーズは火炎放射を放ち騎士達と間合いをとる。

「行くぞみんな！」

「「「「「おおーーーーー！！！！」」」」」

騎士達が一つになりオーズに迫る。

「くっ！こうなったら！」

オーズはオースキャナーを取り、オーズドライバーにセットされた3枚のコアメダルを再度スキャンする。

《スキャンングチャージ！》

メダルを再度スキャンすると、コンドルレッグに装備された、ストライカーネイルを炎が纏う。

「はあああああ・・・」

騎士達とオーズの距離がどんどん狭まる。

そして。

「せいやあああああ！」

「「「ぐわあああああ！」」「」」」

オーズは炎を纏った回し蹴り、プロミネンススパイクを放つ。

プロミネンススパイクを受けた騎士達は大爆発を起こした。

「・・・はあっ！し、しまった！」

この時オーズははっとした。

いくら武装しているとはいえ、相手は普通の人間である。

普通の人間がオーズのスキヤニングチャージを受けて生きているはずがない。

「お、俺・・・人を・・・。」

殺した・・・。と言おうとした時だった。

煙がなくなり、オーズは煙があった場所を見る。

「えっ・・・何あれ？」

オーズはてっきり、騎士達の死体が転がっているかと思ったが、あったのは死体ではなく・・・犬のような玉だった。

「なんだお前・・・けものだまを知らないのか？」

「け、けものだま？」

オーズはこちらに向かって歩いてくるエクレールの言葉に首を傾けた。

「この場所ではフロニヤ力が働いている。例え倒されても死にはしない。」

「そ、そうなんだ・・・良かった・・・。」

よく意味は分からなかったが、死んでいない事にオーズは安心した。

「今まで戦ってきて思った。お前は強い。はっきりいって今、我々の騎士団に欲しいくらいだ。」

「それは・・・。」

「だが、今はまだ敵同士だ。今ここで・・・決着をつける！」

エクレールは2本の短剣を構える。

「・・・分かった。決着を着けよう。」

人が死なない事が分かったオーズは、エクレールの期待に答えるべく、タジャスピナーを構える。

オーズ（火野映司）VSエクレール

決着を着けるべく第2戦目が始まる。

紋章と決着とパンツの持ち主（修正版）（前書き）

第7話の修正版です。

紋章と決着とパンツの持ち主（修正版）

騎士団詰め所。

現在は侵入者搜索の拠点である。

「エクレール隊長は大丈夫でしょうか……。」

「大丈夫だ。エクレならきっと何とかしてくれる。」

1人の騎士の心配事を、騎士団騎士団長であるロランがまるで安心させるように言う。

「しかし……先ほどの報告では、侵入者は突然姿を変えたただけではなく、数十人の騎士達を一瞬で倒しています。隊長が勝てるかどうか……。」

騎士が言うように、侵入者は突然姿を変え、さらに数十人の騎士達を一瞬で倒してしまっている。

「今はエクレを信じるしかない。」

今実際、エクレールを1番心配しているのは兄であるロランである。

それは騎士団の皆が分かっている事である。

だが、ロランはエクレールと兄妹だからこそ信頼し、きっと侵入者

を捕まえてくれると信じていた。

（・・・頼んだぞ、エクレ。）

ロランは心の中で妹の事を思うのだった。

――――

フィリアンノ城に張り詰めた緊張感が流れる。

「行くぞ！」

エクレールがオーズに向かって斬りかかる。

「何の！」

オーズはこれを、タジャスピナーでガードする。

「っ！やるな！」

「君だって！」

互いの武器から火花が散る。

エクレールは一旦オーズから離れ、間合いを取る。そして、もう一度斬りかかる。

「はあ！」

「せい！」

オーズはエクレールの2本のダガーに対し、タジャスピナーではなく、コンドルレッグのストライカーネイルで対抗する。

ダガーとストライカーネイルが音をたてぶつかる。

「久しぶりだ！こんなに楽しい戦いくさは！」

「こっちはあまり楽しくないけどね！」

オーズはストライカーネイルでエクレールのダガーをはじく。

そして、タジャスピナーから火炎弾を発射しエクレールを攻撃する。

「くっ。」

エクレールは火炎弾を避けるが、一発が肩にかすってしまう。かすった部分は一瞬で焼け焦げ、肌が露出する。

「このっ！」

エクレールは接近して攻撃したいが、オーズのタジャスピナーによる火炎弾によって接近できない。

「よし。このまま……。」

「あまり調子に乗るな！」

「てえ、嘘!？」

タジャスピナーによる火炎弾でこのまま押し切ろうとしたオーズだったが、ここで思わぬ事態が。

何と、エクレールが2本のダガーで火炎弾を斬りつけながら接近してきたのだ。

思わぬ事態にオーズは怯んでしまう。

「はぁ！」

「ぐはぁ！」

エクレールの接近を許してしまったオーズは、そのままエクレールの一撃を受け膝を地に着ける。

「これで！」

「っ！まだだ！」

エクレールは再びダガーを振るうが、オーズも負けじとその場で回し蹴りを放つ。

ダガーはストライカーネイルにより弾かれる。

ダガーを弾かれたエクレールは後ろに後退し、再びダガーを構える。

オーズもすぐに立ち上がり、タジャスピナーを構える。

「やはり、そうそう勝ち譲ってくれないか……。」

「悪いけど、こっちにも譲れないものがあるからね……。」

「“仲間との約束”か？」

「そうだね。その為にも……ここで負けるわけにはいかない！」

「ならばこちらも……ビスコッティ騎士団親衛隊隊長の名にかけて……お前を倒す！」

エクレールは再びオーズに向かって斬りかかる。

オーズはそれをタジャスピナーでガードし、右手でエクレールの左腕を掴む。

「このお！」

「うわぁ！」

オーズはエクレールをタジャスピナーから引き剥がし、右に向かって投げ飛ばす。

エクレールはそのまま、地面を転がる。

「はああああ……」

オーズはタジャスピナーを構え、力を込める。

「このっ！」

エクレールは再びオーズに向かう。

そしてオーズの目の前にきた時。

「はああ！」

「!?っ」

オーズは力を込め、炎を纏ったタジャスピナーでエクレールを殴りつける。

エクレールはとっさの判断で2本のダガーを身体の前でクロスさせ、タジャスピナーをガードする。

だが、それでも凄まじい衝撃が走り、エクレールは後ろに向かって吹き飛ばされる。

「はぁ・・・はぁ・・・。」

エクレールの息が上がる。

「防がれた!？」

オーズは今の一撃を防がれた事に驚く。

（驚いたな、今の一撃をとっさに防御するなんて・・・やっぱり、その何とか騎士団の親衛隊の隊長をやってるだけあるな・・・。）

オーズは心の中でエクレールを賞賛する。

（今の一撃・・・まともに受けたら一溜まりもなかった。それに、そろそろ決めないとこちらが危ういな・・・。）

エクレールはオーズの一撃に驚愕しながら、そろそろ決めなければと思う。

エクレールは再びダガーを構える。

すると、エクレールの背後に巨大な紋章が現れる。

「な、何だ！？あの紋章！？」

オーズは驚きの声を上げる。

「もう後がないからな・・・私の得意技で行かせてもらう！」

エクレールは自身の得意技に全てをかける。

「・・・そっか。なら・・・俺だって！」

オーズも、そのエクレールの思いに答えるべく、タジャスピナーを自身の身体の前で構え、オースキャナーを右手で持つ。

「烈風・・・」

エクレールのダガーにエネルギーが集まる。

《ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！……ギガスキャン！》

オーズは、オースキャナーでタジャスピナーの中にあるセルメダル7枚をスキャンしギガスキャンを発動させる。

タジャスピナーにセルメダルのエネルギー弾が精製される。

しばし、沈黙が辺りを支配する。

・
・
・
・
・
・

「十文字いっ！！」

「せいやああああ！！」

エクレールは、紋章砲である烈風十文字を。オーズは、ギガスキャンにより精製されたエネルギー弾を放った。

烈風十文字とエネルギー弾は、オーズとエクレールのちょうど中間でぶつかる。

「この……！」

「くう……！」

両者とも引く気は無い。

そして・・・

その時は来る。

バキン！

凄まじい音と共に・・・烈風十文字は圧殺される。

「何っ！」

「せいやああああ！」

エクレールは烈風十文字が敗れたことに驚き、オーズは更に力を込めた。

そのまま、烈風十文字を圧殺したエネルギー弾がエクレールに迫る。

「くっ！」

エクレールはダガーをクロスし、防御体勢になる。

が、

「ぐわあああああ！」

ダガーがそれに耐えきれず、エクレールは吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「はあ・・・はあ・・・やったか？」

オーズはエクレールを確認する為、壁に叩きつけられたエクレール

に近づく。

「・・・・・・・・私の負けだ・・・」

エクレールは近づいてきたオーズにそう言った。

どうやらダガーでガードした分ダメージは軽減されたようだ。

だが、それでもダメージは大きくこれ以上戦うのは不可能だった。

「ふ・・・・やはり・・・・お前は強いな。」

「いや、そんな事は・・・・君も強かったよ。」

「そうか・・・・だが、戦ってて分かって事がある。」

「分かった事？」

「ああ・・・・、お前、その力が本来の力ではないんだろう？」

「え・・・・？」

オーズは驚いた。確かに今この力は不完全だ。

だが、オーズと今回初めて戦った者がそれに気づいたのはオーズ、否火野映司にとっては驚きだった。

「ふ・・・・凶星か。おそらく、私のように普通の人と戦う事が初めてで心に迷いを生んだんだろうな・・・・。」

「心の・・・迷いか・・・」

確かにそうかもしれないとオーズは思った。

今まで数多くのヤミーと戦ってきたが、普通の人と戦うのは初めてだった。

その事で心に迷いが生まれ、力が十分に発揮できなかったんだとオーズは思った。

「まあ・・・そう言う事だ・・・ぐっ！」

「大丈夫？・・・ん？」

エクレールはそう言い立ち上がろうとするが、ダメージが残っていた為か、壁に寄りかかる。

オーズはそれを心配したが、ある物が目に入った。

それは、エクレールのすぐそばに落ちていた・・・布だった。

「これは？」

「!??っ、ま、待ってくれ!それは!」

エクレールが焦り始める。

そんな事を知らないオーズは、そのまま落ちていた布を拾った。

「こ、これ・・・！」

「・・・終わった。何もかも・・・。」

エクレールはそう思った。

だが・・・

「これ・・・俺のパンツだ！」

「そう、お前の・・・って、何っ!？」

エクレールは更に驚く。

「ま、待て、そのパンツはお前ののか!？」

「そうだよ!間違いない!これは俺が無くした明日のパンツだよ!」
無くしたパンツを見つけ、まるで子供のような歓喜の声を挙げるオーズ。

それに対し、エクレールはポカンとしていた。

「いやゝ良かった!一時はどうなるかと思った!」

「そうか・・・それは良かったな・・・」

エクレールは何だか、ばかばかしく思えてきた。自分はこんな奴と戦っていたのかと・・・。

「ねえ？」

「・・・何だ？」

オーズがエクレールに質問する。

「もしかしてさ・・・パンツを保護してくれたのは君？」

「ああ・・・そうだが。」

エクレールがそう答えると・・・

「いや、本当にパンツを保護してくれてありがとう！あ、そうだ！」

オーズはオーズドライバーを水平し、変身を解除する。

そして、オーズではなく元の火野映司に戻る。

「何か、ずっと変身した状態で喋ってたね。ごめんごめん。」

映司はエクレールに謝罪する。

「別に気にする事では・・・っ。」

「てえ、大丈夫？」

エクレールは歩こうとしたがふらつき、慌てて映司がそれを支える。

「・・・すまない。」

「いいって。」

映司に支えられたエクレールが謝罪するが、映司は気にしない。

「・・・そうだ！」

「何だ？」

「そういえば名前教えてなかったね。俺は火野映司。君は？」

「・・・」

エクレールは答えるか迷ったが。

「・・・エクレールだ。エクレール・マルティノツジ。」

「へえ、エクレーちゃんか。いい名前だね。」

「あ、ありがとう・・・／＼。」

自分の名前を誉められ照れるエクレール。

すると、

突然映司は背を向け、身体をしゃがめた。

「何をしている？」

「いや、エクレーちゃん怪我してるでしょ？おぶって行こうと思っ
て。」

「別にいい。それに今お前は侵入者扱いだぞ。詰め所に行けば捕まるんだが……。」

エクレールは拒否するが、

「別にいいよ。俺が逃げちゃったのもあるし。投降するよ。」

「しかしだな……。」

「それに、エクレちゃんは俺のパンツを保護してくれたからね。その恩も返したいからさあ。ねえ？」

「……分かった。好きにしろ。」

遂にエクレールが折れる。

そのままエクレールは映司に背負われる。

「で、その詰め所ってどこ？」

「あっちだ。」

エクレールの指示で映司は騎士団詰め所がある方向へと歩いて行った。

エクレールが拾った、映司の明日のパンツと共に。

タジャドルコンボ不完全態 説明（前書き）

タイトルの通り、タジャドルコンボ不完全態の説明です。

タジャドルコンボ不完全態 説明

タジャドルコンボ不完全態

スペック

身長…194 cm

体重…87 kg

パンチ力…5.5 t

キック力…13 t

ジャンプ力…155 m

走力…4.5 s / 100 m

構成メダル

ヘッド…タカ

ボディ…クジャク

レッグ…コンドル

使用武器

タジャスピナー

変身者

火野映司

火野映司が、地球とフロニヤルドの間にある不思議な空間で手に入れた、タカ、クジャク、コンドルを使い変身した姿。

本来ならば、通常のタジャドルコンボになるはずだが、ビスコッテ

イ騎士団親衛隊隊長であるエクレール・マルティノッジ戦ではこの不完全態になった。

火野映司の、武装しているとはいえ普通の人にオーズの力を使って良いのか？という心の迷いにより生まれた形態。

スペック的には、オーズの基本コンボであるタトバコンボと本来のタジャドルコンボの中間のスペックを持つ。

タジャドルコンボとの外見的な違いは、タカヘッドがタカヘッド・ブレイブではなく、通常のタカヘッド。胸にあるオーラングルサークルに描かれている図柄が、タジャドルコンボ特有の不死鳥ではなく他のコンボ同様タカ、クジャク、コンドルが別々に描かれているという点が上げられる。

能力は限定されており、

クジャクウイングによる飛行の不可。

クジャクの尾羽を模した羽手裏剣、クジャクフェザーの使用不可などである。

必殺技

プロミネンススパイク。（スキヤニングチャージ）

タジャドルコンボ不完全態の必殺技。コンドルレッグのストライカーネイルに炎を纏わせ、回し蹴りを放つ。威力はプロミネンスドロップに劣るが、広範囲を攻撃できる。

威力は60t

セルメダルエネルギー弾。（セルメダル7枚によるギガスキャン）
タジャスピナーによるギガスキャン。基本は通常のタジャドルコンボ時と同じ。

説明と気迫とビスコッティ騎士団（修正版）（前書き）

第8話の修正版です。

説明と気迫とビスコッティ騎士団（修正版）

現在、映司はエクレを背負い騎士団詰め所に向かっていた。

先の戦いで映司は勝利こそしたが、パンツをエクレが保護していた為恩返しのためで、未だ戦いのダメージがぬけないエクレを背負い騎士団詰め所に向かっているのだ。ちなみに映司は投降する予定である。

「ところでさ・・・エクレちゃん。」

「何だ？」

映司に背負われているエクレが映司に呼ばれた為返事を返す。

「ずっと気になってたんだけど・・・。」

「ああ。」

「・・・何でコスプレなんてしてるの？」

「・・・はあ？」

「いやだってさ、その耳とか尻尾ってコスプレの一種でしょ？さっきの騎士の人達もしてたけど・・・もしかして流行ってるの？」

映司の問いに啞然とするエクレ。とりあえず質問に答える事に。

「いや、この耳と尻尾は我々の身体の一部だ。ちゃんと血液だって流れている。尻尾だって自分で意識すれば動かせるが……。」

「……本当に？」

「ああ、本当だ。」

今度は映司が啞然とする。

「どうした？」

エクレが映司に訪ねる。

「いや……何でもない。」

映司はとりあえず落ち着こうとして、深呼吸した。

そして、次の話題に移る。

「そういえば、このお城綺麗だね。こんなに綺麗なお城見たの初めてだよ！」

「そうだろ。何せフィリアンノ城だからな。」

「へえーフィリアンノ城って言うのか……。」

映司がフィリアンノ城に感心していると

「そういえば……えっと……。」

「映司で良いよ。」

「分かった。それで、映司はどこから来たんだ？耳と尻尾は見当たらないし、あまり見られない服装をしているが……。」

「ああ、そうだね。俺は日本から来たんだよ。」

映司は日本から来たと言った。

「ちょっとまって、今何て言った？」

「ん？いや日本って言ったけど。なんで？」

エクレは日本と言う言葉に嫌な予感がした。

「映司、一つ聞いていいか？」

「別に良いよ。答えられる範囲内ならだけど。」

「分かっている。映司は“何という世界”から来た？」

エクレの質問に映司は、

「えっと……それはどういう意味？」

「とりあえず自分の住んでいる星の名前を言ってくれ。」

「え？それなら“地球”だけど……。」

「やっぱり……。」

エクレの中で何かが確信に変わる。
そして、真実を伝えるべく喋りだした。

「……映司、良く聞いてくれ。」

「うん。」

「まず、ここは“地球”という場所じゃない。」

「うん……へえ？」

映司がポカンとする。

「ここは“フロニャルド”と言う“地球”とは違う世界だ。つまり、
“地球”から見たらここは別の世界、異世界だ。」

「えっと……つまり、今俺は異世界にいるって事？」

「……そういう事になる。現にこの世界には、私のように耳と尻
尾を持っている人しかいない。そして何より“フロニャ力”がある。
」

エクレの発言に映司は……

「はあ……また冗談を……」

完全に頭が着いて行けてなかった。

「真実だ。どうやってフロニヤルドに来たかは知らないが……。」

エクレとどめの一撃。

そして、映司は……

「てえ……嘘おおおおおおお！？」

頭がようやく追いつき、エクレの言葉を理解し絶叫した。

――
――
――
――

場所は変わり、騎士団詰め所。

「……遅いですねえ隊長。」

「ああ……。」

詰め所の外で2人の騎士が会話をしている。

彼らはエクレが指揮する親衛隊のメンバーである。未だ帰らない自分達の隊長を心配していた。

「もしかして……やれちゃったのかな……。」

「ばかか！隊長がやられるわけないだろ！」

「だと良いんだけど・・・。」

「ん?・・・おい!あれ!」

騎士達が会話をしていると、別の騎士が叫んだ。

「どうした?」

1人が叫んだ騎士の先を見ると・・・

「なあっ!あれは!・・・侵入者!?」

この言葉に反応した騎士達が集まってくる。

「侵入者だって!?」

「ああ!間違いない!」

その場が騒がしくなる。

「俺、ロラン団長に報告してくる!」

「・・・いや!ちょっとまって!」

ロランに報告に向かおうとした騎士を、別の騎士が止める。

「何故止める!」

「侵入者のやつ・・・何か背負ってるぞ?」

別の騎士が何かを背負っているのを見つける。

「背負っている？一体何を？」

「ここからでは分かりにくい。双眼鏡を貸してくれ！」

双眼鏡を要求し、それを使い侵入者を見る。

そして、騎士達は驚愕した。

「なあっ・・・あれは・・・隊長!？」

「な、何だって!？」

「本当か!」

騎士達が見たのは、侵入者に背負われている・・・自分達の隊長であるエクレであった。

「全員、臨戦態勢!隊長が敵に捕らわれている!これより隊長を奪回する!」

その言葉を聞いた騎士達は自分達の隊長を奪回すべく臨戦態勢に入った。

・
・
・
・
・

「あれかな？騎士団詰め所って所。」

映司はようやく、エクレが言っていた騎士団詰め所にたどり着いていた。

そのエクレは戦闘で疲れていたのか今はぐっすりと寝ていた。

「騎士って言っても、やっぱり女の子なんだな・・・」

映司はエクレが女の子である事を再認識する。

（さっきは驚いたな・・・まさかここが異世界だなんて。）

映司は、先ほどの事を思い出していた。

確かに始めは驚いたが、これも旅の延長線と考える事にし、これを受け入れた。

「さあ、後ちよつとだ。」

映司は騎士団詰め所に足を踏み入れた。

しばらく歩いていると、やはり予想していた事が起こった。

「止まれ！侵入者！」

「隊長を解放しろ！」

騎士達が槍を構え映司を取り囲む。

「すみません。医務室はどこですか？」

映司は騎士の1人に聞くが・・・

「止まれ！医務室だと？そこに何の用がある！」

当然スルーされる。しかし映司は、

「もう一度聞きます。医務室はどこですか？この子を連れて行きたいんだけど。」

「黙れ！大人しく隊長を解放しろ！」

それでも取り合ってもらえない。

だが、映司は・・・

「大人しく医務室を教えてください。俺はこの子に怪我をさせてしまった。だから俺はこの子を医務室まで連れて行く責任があります。投降もします。だから・・・そこをどいて下さい。」

映司の強気な発言、鋭い目つきに騎士達は後ずさる。

ここにいる騎士全員が映司の気迫に押されていた。

その時、

「全員、武器を収めろ。」

「き、騎士団長？」

騎士達は驚き、急いで武器を収める。

「……。」

映司は騎士達の奥にいる男……ロランを静かに見る。

ロランは口を開く。

「……君が例の侵入者かい？ エクレをどうするつもりだい？」

ロランの問いに映司は、

「先ほども騎士の皆さんにも言いました。俺はこの子を医務室に運びたいだけです。」

「その答えに、偽りはないな？」 「ありません。」

映司はきっぱりと言いつ切る。

「……分かった。君は嘘をついてはいないようだな。着いてくれ。」

「はい。」

「ちょ、ちょっと待って下さい騎士団長！ この男を信用するんですか!？」

騎士の1人が異義を立てる。

「彼は嘘を言っていないさ。それに悪い侵入者がエクレを怪我をさせてしまったからと言って敵の拠点まで背負ってくるかい？」

「そ、それは・・・」

「それに、彼の眼は嘘をついている眼ではないよ。」

「・・・」

遂に、騎士は黙り込む。

「待たせたようだね。」

「いえ。」

「自己紹介がまだだったね。私はビスコッティ騎士団騎士団長のラン・マルティノッジだ。」

「俺は火野映司と言います。マルティノッジってまさか・・・。」

「ああ、君が背負っているエクレール・マルティノッジの兄だ。」

「そうですか。エクレちゃんの・・・。」

映司は納得する。

「さあ、遅くなったな。医務室に案内するよ。」

「分かりました。」

歩き出したロランに着いて行く映司。

そのまま2人はエクレを連れて医務室に向かった。

また、映司にとっては、まともに話ができる人が現れた瞬間でもあった。

出会いと聴取と晴れる疑惑（修正版）（前書き）

第9話の修正版です

久しぶりにミルと登場です。

出会いと聴取と晴れる疑惑（修正版）

「それで、君は“地球にある日本”から来たと。」

「はい。そうです。」

現在、騎士団詰め所の一室では騎士団長であるロランと映司がテールを挟み、話し合いをしていた。

話し合いと言っても、ロランによる侵入者だった映司への事情聴取だが。

ちなみに、映司はロランの妹であるエクレを背負っていたが、先ほど医務室にエクレを預けたので今はいない。

「そうか。ではここが“君がいた世界ではない異世界”というのは認知しているかな？」

「はい。エクレちゃんを背負っている時に彼女から聞きました。」

映司はエクレを背負っている時に、この世界の事を大まかに説明して貰っている。そのため、ここが自分のいた地球ではなく、異世界“フロニヤルド”であることは認知していた。

「そのわりには、だいぶ落ち着いているね？」

「はい。俺は地球では旅をしていたんですよ。最初は驚きましたけど、今はこれも旅の延長線と考えています。」

映司は自分の考えを口にする。

「それなら大丈夫そうで何よりだ。」

ロランは安心したという顔をする。

「だが、これだけははっきりさせて欲しい。」

「？」

「君は我々の“敵”ではないんだよね？」

「はい。誓ってでも。」

ロランの問いに、映司ははっきりと答えた。

「うむ。では最後に聞きたい事がある。いいかな？」

「何ですか？」

「君は、一体どうやってフロニヤルドに来たんだい？普通は、めったな事がない限りこちらには来れないんだが。」

ロランの問いに映司は、

「ああ、それなんですけど・・・確か変な剣をくわえた犬が作った穴に、エクレちゃんくらいの男の子が落ちそうになったから、それを助けようとして・・・それで手を掴んで引き上げようとしたら、その犬に押されて穴に落ちちゃったんですよ。」

「・・・まで、その話しは本当か!？」

突然ロランが驚いたように聞いてくる。

「え? はい。そういえばあの男の子どもが行ったんだろ・・・」

映司は本当だと言い、未だ行方の知れない少年を心配する。

「・・・もしかして、その少年は金髪ではないか？」

「よく知ってますね! そうですよ。」

映司がそう答えると、何故かロランは顔面蒼白になる。

「えっと・・・ロランさん? 大丈夫ですか？」

映司はロランを心配し、声をかける。
すると、

「な、何という事だ! 我々は取り返しのつかない事を・・・映司殿
!」

「は、はい!」

突然ロランに呼ばれ、思わず背筋を伸ばす映司。

「すまない・・・我々は君に取り返しのつかない事をしてしまった
ようだ。」

「え、えっと・・・。」

ロランの突然の謝罪に困惑する映司。

「今から私はこのビスコッティ共和国の代表領主の元に行く。映司殿も来てくれ。」

「え、あ・・・わ、分かりました。」

ロランはそう言うと、部屋を出て行った。映司もそれに着いて行くのだった。

— — — — —

ここは、騎士団詰め所の医務室。

この医務室のベットの一つにエクレールはいた。

「だから、そう心配するな。ちょっと疲れが溜まっていたただけだ。」

「心配するでありますよ！もしエクレの身に何かあったら・・・」

「そうだよエクレ。エクレに何かあったら僕も心配するよ。」

現在エクレは2人の人物と対面していた。

学院主席のリコッタと勇者のシンクである。

この2人は、先ほどまで違う場所にいたが、エクレが医務室に運ばれたと聞き飛んできたのだ。

「はぁ・・・2人とも。私は大丈夫だからそう心配するな。今日の夕方頃には復帰できるから。」

「・・・本当でありますか？」

「ああ、本当だ。」

「本当に？」

「本当だと言ってる。」

エクレの言葉にリコッタ、シンクが順番に聞く。エクレはそれに大丈夫だと答えた。

「それなら良いんだけど・・・そういえばその“侵入者”は今どこにいるの？」

シンクがエクレに質問する。

「ん？ああ、“映司”の事か。今兄上から事情聴取を受けているはずだが。」

「“映司”？それが侵入者の名前でありますか？」

映司と言う、聞き慣れない言葉に？を浮かべるリコッタ。

「ああ、フルネームは“火野映司”だ。私は映司と呼んでるがな。」
リコッタの疑問に答えるエクレ。

「あ、そういえばエクレ。あのパンツはどうしたの？」

突然思い出したようにシンクが言った。

「あのパンツか？あれは映司のだったからもう返却したが。」

「えっ！そうだったのですか！？」

「ん？そうだが・・・そういえばものすごく感謝されたな。」

映司に感謝された時を思い出すエクレ。

「そうだったのか・・・。」

「そうだったのでありますか・・・。」

「さて、何でそんなに残念そうな顔をしている。」

何故か残念と思う2人であった。

—
—
—
—
—

「・・・暇だなあ。」

映司は思った。

映司は現在、フィリアンノ城の応接室にいた。

あの後、ロランに着いて行っただが『この部屋で待っていてくれ』といいどこかに行ってしまった。それから既に数十分待たされている。「でもさすが一国のお城だな。ソファーから何までいかにも高級って感じがする。」

実際、映司がこの城を詳しく見るのは初めてである。

騎士達から逃げていた時は詳しく見れなかった為、映司は歩きながら壁などを見ていた。

「すみません。遅くなっちゃいましたね。」

後ろから声が聞こえ振り向くとそこには・・・エクレと同年くらいの少女がいた。

「初めまして。私はこのビスコッティ共和国代表領主のミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティと申します。」

「・・・。」

「あの・・・どうかなされましたか？」

「あ。いえ別に。初めまして、火野映司と言います。」

映司は目の前の少女、ミルヒに自己紹介をした。

「あ、お座りになって下さい。今お茶をご用意しますから。」

「ありがとうございます。」

映司が席に着くと、数名のメイドがお茶や茶菓子を映司とミルヒの前に置いていく。

お茶や茶菓子を置き終えるとメイドは一礼して部屋から出て行った。

「良かったら飲んで下さい。このお茶はこの国の名産なんです。」

ミルヒが笑顔で映司に話しかける。しかし映司はこの笑顔に違和感を感じた。

「あの、姫様。」

「何ですか映司さん？」

「その、失礼かも知れないんですが・・・無茶してませんか？」

「え？」

映司が感じた違和感。それはミルヒの笑顔が無理をしているのでは？というものだった。

「・・・分かりましたか？」

「はい。」

そう言うとミルヒの表情が曇る。どうやら中したようだ。

「その・・・良かったら教えてくださいませんか？今、俺が置かれている状況。」

「・・・分かりました。」

ミルヒは重い口を開くのだった。

現状とお見舞いとお姫様（前書き）

第10話です。

最近友達からガチャガチャのアストロスイッチのスモークをもらいました。

現状とお見舞いとお姫様

「その・・・良かったら教えてくれませか？今、俺の置かれている状況。」

「・・・分かりました。」

ミルヒの重い口が開く。

「その前に、今我が国の状況から説明しますね。そちらの方が分かりやすいと思うので。」

「そうですか。」

どうやら映司の状況より、まずビスコッティについて話すようだ。

「我々ビスコッティ共和国は少し前から隣国のガレット獅子団に幾多の戦を仕掛けられ敗戦が続いていました。」

「・・・侵略戦争ですか。」

「はい。」

今の話を聞いた映司は、その戦が隣国からの“侵略”と解釈し、ミルヒもまたそれを認めた。

「でも・・・分からない事があるんです。」

「分からない事？」

ミルヒの言葉に？を浮かべる映司。

「実は、ついこの間まではガレット獅子団とは仲は良好だったんです。それがなんでいきなり……。」

「……難しいですね。」

「はい……。」

ミルヒの曇っていた表情がさらに曇る。

「あ、すいません。話しがそれちゃいましたね。話しを戻します。それで我々ビスコッティ共和国は敗戦を重ね後が無くなってしまったのです。」

「なるほど。」

「そこで、私は“最後の切り札”を使う事にしました。」

「最後の切り札？」

普通の切り札なら分かるが、最後の切り札と言う言葉に反応する映司。

「はい。代表領主のみに許される“勇者召喚”です。」

「勇者召喚？」

映司はポカンとする。実際、勇者召喚なんてゲームやマンガの話し

だと思っていたからである。

「私は勇者召喚をし、シンク・イズミさんに勇者になってもらいました。勇者様のおかげで重要な今回の戦は勝利する事ができました。」

「そうですか。（あの子シンク・イズミって言うのか・・・）」

映司は金髪の少年の名をここで初めて知った。

「でも・・・ここで問題が発生してしまいました。」

「・・・もしかして、召喚された勇者は帰れない。とか？」

「はい・・・。」

映司の勘が当たった。

「そしてもう一つ問題が発生しました。はっきり言って、こちらの方が重大です。」

「・・・。」

ミルヒの言う、重大な事に映司は静かに聞こうとした。

「その問題は・・・火野映司さん、あなたの存在です。」
「どうやら映司に問題があるようだ。」

「俺が？」

「はい。」

映司は驚きを隠せない。

「映司さん、あなたがこちらに来る前に、金髪の少年を助けようとして犬におされて穴に落ちた。そうですね？」

「はい。間違いないです。」

「その犬はあの子ではないですか？」

ミルヒが横を向き、映司もつられて横を向く。

そこには、忘れる事のない“あの犬”がいた。

犬は映司に気づくと、映司に近づいた。しかし犬に元気はなく、落ち込んだようだった。

「本来、勇者召喚の対象は1人なんです。映司さんは勇者召喚の枠には入っていませんでした。いえ、いないはずでした。しかし今、映司さんはここにいます。我々は映司さんを・・・勇者召喚に巻き込んでしまいました。」

「・・・。」

映司はただ静に聞き、現状を理解した。

「その・・・ごめんなさい！」

立ち上がり、映司に謝罪するミルヒ。

「私が・・・もつと・・・しつかり・・・して・・・いれば・・・こんなこと・・・には・・・本当に・・・ごめんなさい・・・。」

謝罪をするミルヒだが声が途切れ途切れになり、頬を涙が伝い始める。

「・・・いいじゃないですか。」

「・・・え？」

映司の突然の言葉に驚くミルヒ。

「立派ですよ。その年でそんな判断ができるなんて。それに姫様はこの国の為にした事でしょ？ だったら誰も何も言いませんよ。少なくとも俺は言いません。」

「映司さん・・・。」

「だから、あなたは胸を張って下さい。そんな顔じゃあみんなついて来ませんよ。それに、そんなんじゃあ可愛い顔が台無しですよ。だから・・・あなたは笑って下さい。」

映司の言葉に驚くミルヒだが、この言葉で少し気が楽になった気がした。

「映司さん・・・ありがとう。」

ミルヒは映司に感謝し、再び席に着く。

「それで、映司さん。映司さんは何日後ぐらいにご帰還したいとお
思いですか？」

「そうですね・・・16日後くらいには。仲間との約束があるので
」

映司の答えにミルヒは、

「そうですか！それなら希望が持てそうです。」

「そうなんですか？」

「はい！今、学院で召喚した勇者の帰還方法を探しているんです。」

どうやら、帰還方法は捜査中らしい。

すると、ドアが開きメイドが入ってきた。

「姫様、そろそろ。」

「え、もうですか？」

メイドが何かをミルヒに伝えと、ミルヒは立ち上がる。

「すいません、映司さん。今日はここまでみたいです。」

どうやら時間らしい。

「あ、こちらこそ。時間をとらせてしまって・・・。」

「いえ、こちらこそ・・・そうだ！」

ミルヒは突然何かを思い出したように手を叩いた。

「実は今日、戦の勝利祝いに私のコンサートをやるんです。良かったら見に来て下さい。」

「分かりました。必ず行きます。」

映司は笑顔で答えた。

そしてミルヒはメイドに連れられ、部屋を出て行った。入れ違いでロランが部屋に入ってくる。

「どうだった？ 姫様は？」

「ええ、すごいですよ。あの年でもう一国の代表なんて。責任感もありますし。」

映司は素直に答えた。

「そうか・・・それは良かった。」

ロランは安心したように言った。

「それより映司殿。これからの事だが、行動の制限はなしになった。」

「本当ですか!？」

「無論だ。」

行動の制限がなくなる事に映司は喜んだ。

「これからどうする気だい？」

「とりあえず、エクレちゃんのお見舞いに行こうと思います。」

「そうか。エクレも喜ぶだろう。」

そう言うとき映司は部屋から出て行き、騎士団詰め所にある医務室に向かうのだった。

—
—
—
—
—

「全く・・・なんであんなに残念そうな顔をするんだ。」

エクレは先ほどのシンクとリコッタの表情に不快感を覚えていた。

実際あの後、『せっかくエクレの弱みを握ったでありますのに・・・』とか『エクレをいじるネタが・・・』とか言っていた。

「あゝ不愉快だ。」

今、医務室にはエクレ1人である。

リコッタは学院の様子を見に行き、シンクはトイレに行った。あの急ぎようはおそらく大きい方だろう。

「それにしても・・・暇だ。」

だが、この2人がぬけた途端に部屋が静まり返り暇になった。

「・・・大人しく寝るか。」

エクレは寝ようと身体を横にした時、

扉が開いた。

「失礼します・・・。」

「映司？」

入ってきたのは映司だった。エクレは起き上がり映司を確認する。

「あ、エクレちゃん。どう調子は？」

「夕方頃には復帰できそうだ。」

「それなら良かった。」

映司はホッとした。

「何か用か？」

「ん？ いや、お見舞いに来たんだよ。はいこれ。」
「これは？」

「見て分らない？ 果物だよ。」

映司はお見舞い用に果物を持参していた。

映司はナイフで果物の皮を剥き始め、食べやすい大きさにカットした。

「食べる？」

「・・・いただく。剥いてもらったからな。」

エクレは果物をいただく事にした。

「はい。じゃあ・・・。」

「まで。どういうつもりだ？」

「何って、食べさせてあげようかと。」

「何でそうなる！」

どうやら、映司がエクレに果物を食べさせてあげようとしたらしい。

詳しく言うなら、『はい、あゝん』である。

「自分で食べるからいい！」

「いやだって、怪我人にはこうして食べさせてあげると、俺の仲間が言っていたんだけど・・・」

ちなみに、こんな知識を映司に与えたのは、“自称戦う医者であり、おでん大好きで1億稼ぐ事に成功した某〇達”である。

「誰だそんなの教えた奴は・・・まあ、その・・・どうしても言うなら・・・別にいいが・・・／／／。」

エクレは頬を赤くしながら言った。

「そう？じゃあ・・・はい、あゝん。」

「あ、あゝん／／／」

エクレが映司から食べさせてもらった果物を口に入れたその時。

「ふう／スッキリした。てえ、あれ？」

タイミング悪く・・・シンクがトイレから帰ってきたのだ。

「※@£%#℃〒!？」

果物に邪魔をされ、エクレは変な悲鳴を上げるのだった。

「あれ、君って！」

「あ！あの時の！」

驚きの声を上げる映司とシンク。

今、ここにビスコッティの勇者 シンク・イズミと仮面ライダーオ
ーズ 火野映司が再会した。

再開と講義とパンツの必要性（前書き）

第11話です。

今回は短めです。

再開と講義とパンツの必要性

「あれ、君って！」

「あ！あなたは！」

互いに驚きの声を上げる映司とシンク。

「・・・なんだ？お前達知り合いなのか？」

口にあった果物を食べ終えエクレが質問する。

「そうだよ。と、言っても今日の朝方会ったばかりだけどね。」

「でも、良かったですよ！落ちた後あなたが見当たらなかったの
」

どうやらシンクも映司の行方が気になっていたようだ。

「そうだ！僕、シンク・イズミと言います。」

「俺は、火野映司。よろしく、シンク君。」

「はい！映司さん。こちらこそ！」

互いに握手を交わす2人。

「そういえば、シンク君はこの国の勇者なんだって？」

「えっ！何でそれを！？」

シンクが驚く。

「さっき、ここのお姫様とお話してきた時に教えてもらったんだよ。」

「なるほど。」

映司の説明に納得するシンク。だがここで、新たなる疑問が。

「映司さんはエクレといつ知り合ったんですか？だいぶ親しそうでしたけど。」

シンクの新たなる疑問。それは映司とエクレの関係だった。

「あゝ、仲良く見えた？」

「見えますよ。果物を食べさせてあげるんですよ？」

「それもそうだね！」

「そうですよ。」

ハハアと互いに笑う映司とシンク。エクレは着いていけない。

「それで、どんな関係なんですか？」

「特に特別ではないよ。そうだな・・・しいて言うなら“好敵手”かな？」

「好敵手？」

シンクの頭に？が浮かぶ。

「俺、最初エクレちゃんと会った時は敵同士だったんだよ。」

「そうなんですか！？」

最初は敵だったと言う映司。エクレはそれに腕を組み、うんうんとうなずく。

「まあ、その時俺は侵入者扱いだったんだけどね。」

「じゃあ・・・侵入者って・・・。」

「そう、俺だよ。」

シンクは驚き、そして唾然とする。

先ほどの侵入者騒ぎの元凶がここにいる事にも驚いたが、それより映司が侵入者だった事の方が驚きだったようだ。

「いやゝ。エクレちゃんは強かったなゝ。」

「何を言う。映司は私に勝っているじゃないか。」

「えっ？エクレ負けたの！？」

「だからこうしてベットで寝てるんだが。」

何を言っていると言う表情のエクレ。シンクにまた驚きが一つ。

「じゃあ、蝶柄のパンツの持ち主は・・・映司さん!？」

「そうだよ。俺の大切な明日だよ!」

パンツの話になり、テンションが上がる映司。

「何でパンツなんか持ち歩いているんですか？」

シンクは気になったので質問する。

「実は子供の時祖父に、『男はいつ死ぬか分からないから、パンツだけは常に一張羅はいておけ』って言われてね。それに感銘を受けたんだよ。」

「そうだったのか・・・知らなかった。」

エクレは軽く呆れ顔になる。

しかし、シンクは違った。拳を握りしめ、わなわなと震えている。

「どうした? 勇者? どこか悪いのか?」

エクレが心配するが・・・

「・・・っ・・・い。」

「ん? 何だって?」

「かっこいい!!」

「!?!」

突然かっこいいと言ったシンク。それに驚くエクレ。

「かっこいいです! 映司さん!」

「シンク君。分かるのかい? パンツの素晴らしさが!」

「はい!」

何か変なテンションになってくる2人。

「お、おおい。2人共く戻ってこい!」

エクレは2人を呼び戻そうとするが・・・

「映司さん! 是非僕にパンツの極意を教えてください!」

「よし、それじゃあ講義を始めよう。」

時既に遅く。映司はどこから持ってきたか分からないホワイトボードを使い、シンクはベツトをイス代わりにしてメモ帳とペンを持っていた。

ちなみにホワイトボードには、“明日のパンツの必要性について”と書かれていた。

「・・・・・・・・。」

ポカンとするエクレ。

すると、

「ん？どうしたエクレ？」

ロランが現れた。

「兄上！あの2人を止めて下さい！なんか変な事を始めました！」

「変な事？」

エクレは必死にロランに訴えかける。

「パンツについて講義を始めているんです！早く止めさせて下さい！」

「あ、ロランさん！」

シンクがロランに気づいた。

「勇者殿、映司殿これは一体……。」

「見て分かりませんか？“明日のパンツの必要性について”の講義ですよ！」

「ロランさんもどうですか？」

お怒りと露天と姫様誘拐（前書き）

第12話です。

若干オリジナルになっています。

お怒りと露天と姫様誘拐

時刻は夕方を少し過ぎた頃。

ビスコッティ共和国の象徴、フィリアンノ城全体を眺める事ができる丘。

ここに4つの人影があった。1つは男、3つは女の人影。

この人影にはビスコッティの人々が持つ、犬の耳や尻尾を持っていない。

男はどこか獅子を思わせる耳と尻尾を持ち、ビスコッティの勇者であるシンク・イズミとあまり変わらない年頃だろう。

女に関しては、1人は黒猫を彷彿とさせる耳と尻尾、もう1人は虎柄の耳と尻尾を持ち、最後の1人に限っては上記のように猫系ではなく兎である。

「なあ、その勇者ってのは強いのか？」

男が呟く。

「まあ、戦ってみれば分かるか・・・頼んだぜ。」

男がそう言うと、3人の女はフィリアンノ城に向かって行った。

そして男は、女達とは反対の方向に向かって行った。

――――

「……………」

「あのく、エクレちゃん？」

「……何だ。」

「やっぱり……怒ってる？」

「当たり前だ！」

フィリアンノ城の廊下、ここに2つの人影があった。1人はビスコッティ共和国騎士団親衛隊隊長であるエクレール・マルティノッジ、通称エクレ。

そしてもう1人は、仮面ライダーオーズであり元侵入者の火野映司、通称映司。

ちなみにエクレは先ほどまで医務室のベットで寝ていた身である。

「その……本当にごめん。」

「反省してるのか？」

「・・・はい。」

何故映司が謝っているのか？それは、約数時間前までさかのぼる。

エクレがまだ医務室で寝ていた時、映司はお見舞いに訪れた。その際にシンクと再会、盛り上がった2人は映司のパンツの話になり、遂にはパンツの講座まで始めてしまったのだ。エクレの目の前で。

しかも、エクレの元に訪れたロランをも巻き込み講座は続いた。終わったのは夕方頃、つまりエクレの復帰予定の時間だった。

講座が終わった後、『地球に帰ったら一張羅買うぞ！』と意気込むシンクや、『パンツは天日干しがいいのか・・・うむ、勉強になった。』と感心するロラン。

もはや、おかしい状況になっていたのだ。

この講座のせいでエクレは完全に参ってしまい（主に精神が）、講座を終えた映司に怒りをぶちまけたのだ。

映司は必死に謝っているが一向に許してもらえず、今にいたる。

「本当にごめん！パンツの事分かってもらえてその・・・嬉しくて・・・つい。」

「そのせいで私がどんな思いをしたと思っている！」

エクレの怒りは収まらない。

そこで映司は・・・

「本当に・・・すみませんでしたあっ！」

「なあっ！」

遂に、土下座した。

「本当にごめん！今度1日何でもするから！」

「何でも？本当か？」

「本当に！あ、でも『死ね』とかは無しね。」

「分かっている・・・よし、今回は許そう。」

「本当に！？」

映司がバアツと顔を上げる。

「ああ・・・でも今度何でもしてもらうからな。約束だぞ。」

「分かったよ！エクレちゃん！」

ようやく映司はエクレに許しをもらったのだった。

「ほら、さっさと来ないと置いて行くぞ。」

「あ、ちょっと待ってよ。」

先に行こうとするエクレ。今この2人はビスコッティの代表領主であり世界的歌手であるミルヒオーレ、通称ミルヒのライブ会場に向かっていている途中だった。

「ん?・・・あれは・・・」

エクレを追いかけようとした映司は、ふと右側に見覚えがある物が一瞬見えた。

「早くしろ!置いて行くぞ!」

エクレの声で我に戻った映司はエクレの後を追いかけて行った。

—
—
—
—
—

現在シンクは城内を駆け回っていた。

「えっと・・・お風呂は・・・」

シンクはお風呂を探していた。

映司によるパンツ講座の後、怒りを爆発させたエクレから逃げるように医務室から逃げていた。

「映司さん・・・大丈夫かな?」

エクレの怒りの犠牲になった火野映司を心配した。

「でも・・・今はお風呂だ！」

気持ちを再び切り替え、お風呂探しを再開する。

「えっと・・・確かここらへんに・・・」

シンクが歩きながらキョロキョロしていると・・・

「・・・お、あれかな？」

突然通路に照明が灯り、その灯りはある建物に続いていた為、シンクはそこがお風呂ではないかと予想する。

「とりあえず行ってみよう。」

シンクはその建物に向かった。そして中へと入って行った。

入り口に貼ってある貼り紙に気づかずに。

「やっぱりお風呂だ。」

シンクの予想は見事に的中した。

「いやっほおー♪」

ノリノリで服を脱ぎ捨て、脱衣場を抜け、風呂のドアを開け中に入った。勿論腰にはバスタオルを巻いている。

「すごい露天だああ♪」

お風呂がまさかの露天風呂である事に感激するシンク。

満天の夜空を見ながら、そのまま歩を進める。

バシャア。

何かが湯をかぶった音がした。

「あれ？先客かな？」

シンクは音のした方を見る。

そこには・・・ピンク色の髪を持ち、耳と尻尾も髪同様にピンク色、さらにはシンクと同じ年くらいの・・・少女がいた。

「てえ・・・ひ、姫様!？」

見間違うはずがない。そこにいたのは・・・このビスコッティ共和国の代表領主であるミルヒオーレその人であった。

しかも、素っ裸で。

「へえ？ゆ、勇者様!？」

どうやら向こうも気づいたようだ。

しばしの沈黙が続く。

「あ、あの・・・」

ミルヒが沈黙を破りシンクに話しかける。

「み、見てません！見てませんから！／＼／＼」

「へえ？あ・・・きゃあっ！／＼／＼」

シンクのこの発言により、今自分が素っ裸なのに気づいたミルヒ。

互いに目のやり場に困る。ミルヒに限っては、どこかに身を隠そうとし動き回る。

ツルツ！

マンガでいかにも滑ったという音がした。

「きゃあ！？」

「ひ、姫様！」

どうやらミルヒが石鹼を踏んで滑ったようだ。

シンクはそれに気がつき、走った。

そして、手を伸ばしミルヒの手を掴み自分の元に引き寄せた。

あの時、自分を助けようとした映司のように。

「大丈夫？ 姫様？」

「はい・・・何とか。」

「良かった・・・ん？」

ミルヒを助けひと安心のシンク。

だが、ここで違和感に気づく。

「あの・・・どうしましたか？」

心配したミルヒが声をかける。

シンクはここで違和感について考えた。

（ここはお風呂。いるのは僕と姫様だけ。すぐ近くにいます。お風呂
裸・・・はっ！）

シンクはミルヒを見た。

そこには・・・

「うあああああ！」

「勇者様！？」

ミルヒの手を離し、浴槽に飛び込んだ。

ミルヒはポカンとしている。

「ひ、姫様！か、体隠してください！」

「へえ？あっ・・・／＼／＼」

シンクに言われ、顔を赤くするミルヒ。

ミルヒは体を隠しながら脱衣場へ向かう。

「ゆ、勇者様。」

「は、はい！」

脱衣場に入ったミルヒはドア越しにシンクに語りかける。

「突然の事とかでバタバタしていましたけど・・・今度また色々お話しましょう。これからの事とか。」

「は、はい！」

ミルヒはそう言うのと脱衣場の奥へと消えた。

「はぁゝ緊張したぁ・・・」

シンクは思わず言葉を漏らす。

「それにしても・・・綺麗だったな・・・。」

シンクは先ほどのミルヒを思い出す。

「・・・はっ！いけない！煩惱退散！煩惱退散！」

おけを頭に打ちつける。

「・・・もう出よう。もう姫様もいないと思うし。」

シンクはそう考え、浴槽を出る。そして脱衣場に向かおうとした時だった。

「きゃあああああ！」

「！？、姫様！」

今日3、4回目になるミルヒの悲鳴。

しかし、今回ののは明らかに先ほどまでのとは違った。

シンクは急いで脱衣場へ。そこで5秒という奇跡の速さで着替えをすませ、脱衣場を出た。

そこでシンクが見た物は・・・。

「お前が勇者か？」

手足を縄で縛られ口はテープのような物で塞がれているミルヒ。

そのミルヒをお姫様抱っこしている女が訪ねた。

「そうだけど・・・君達は？」

シンクはその女に訪ねた。

「私達はガレット獅子団のガウル様直属の秘密諜報部隊。私はベール・ファールトン。」

「ウチはジョーヌ・クラフティ。」

「私はノワール・ヴィノカカオ。」

「「3人揃って、ジェノワーズ！」」

3人が名乗り終わると、後ろから色とりどりの煙りが上がる。ベールとジョーヌはポーズをとるが、ノワールはミルヒを抱えている為ポーズをとらなかった。

「ジェノワーズ？（ていうかどこぞの戦隊もの？そして1人だけポーズとってないな・・・。）」

シンクは内心くだらない事を考える。

「お前の姫様は私達が預かった。」

「取り返したいなら、」

「ミオン砦まで来るんやな。」

3人が順々に言い放つ。

「どうして姫様を誘拐する！」

シンクは問う。

「ガレット獅子団の王子である、ガウル様は勇者であるあなたと一騎打ちを所望です。」

「それまで、姫様はこちらで預からさせてもらおうで。」

「さて、どうします？ビスコッティの勇者さん？」

ジェノワーズの問いにシンクは・・・

「・・・分かった。受けてたつよ！僕はビスコッティの勇者だ！どこの誰だって戦ってやる！」

シンクはジェノワーズに向かって叫んだ。

ここに、要人誘拐奪還戦が成立した。

しかし、彼らは知らなかった。

この要人誘拐奪還戦において、不死鳥が降臨する事を・・・

砦と接待と相棒の意志（前書き）

第13話です。

戦闘開始は次になります。

砦と接待と相棒の意志

現在フィリアンノ城の大浴場前にて、ビスコッティね勇者シンク・イズミとジェノワーズが対峙していた。

「では、要人誘拐奪還戦成立ですね。」

「ミオン砦で待ってるで。」

「それでは。」

ジェノワーズはそう言うのとミルヒを抱えてどこかへと飛び去って行った。

「急いで追わないと！」

シンクはジェノワーズを追うとする。そこへ・・・

「勇者！」

「エクレ！大変なんだ！姫様が・・・」

エクレが来た為事情を話そうとしたが・・・

「このおおおお！アホ勇者がああああ！」

「へう！」

エクレはシンクに対して跳び蹴り（技名は制裁&親衛隊隊長キック）

を放ち、シンクはそれをモロに受けた。

「いきなり何するの!？」

「こちらのセリフだ!簡単に宣戦布告を受けてどうする!」

「・・・え？」

宣戦布告と言われ、キョトンとするシンク。

「あれは、要人誘拐奪還戦の宣戦布告だ。何故断らなかった!」

「え?宣戦布告って断れるの?」

「勇者・・・まさか知らなかったのか?」

シンクがそんな言を言うので、とりあえずエクレは聞いてみる。

「うん。知らなかった。」

「な、何だと!」

「だってそんな事エクレ教えてくれなかったじゃん!」

シンクの言うとおり、エクレは宣戦布告については教えていなかった。

「そ、それは・・・。」

「エクレちゃん!」

エクレに遅れる事数分、映司が追いついた。

「あ、映司さん。」

「シンク君？え？何、今どういう状況？」

映司が状況を掴めずいると、

「簡単に言うと姫様が誘拐された。そしてこのアホ勇者が宣戦布告を受けたんだ。」

「なるほど・・・てえ、ええええええ！？」

エクレの説明に驚く映司。ミルヒが誘拐されたのでしょうがないが。

「ど、どうするの？」

「決まっている。ミオン砦に向かうぞ！勇者準備しろ！」

映司の質問に答えるエクレ。そしてシンクに準備をさせる。

「エクレちゃん俺m「映司は駄目だ。」どうして!？」

エクレは映司の動向を却下した。

「映司。私はさっき映司がここに来た、いやここに来てしまった理由を聞いたな。」

「そうだけど・・・」

実はシンクとミルヒが浴場で遭遇していた頃、エクレは映司がフロニャルドに来たこれまでの経緯を聞いていたのだ。

「映司は望まずしてここに来てしまった。我々のミスで勇者召喚に巻き込んでしまった。だからこそ動向は認められない。」

「でも！」

「映司。ここは我々ビスコッティ騎士団に任せてくれ。映司の不思議な力が無くとも姫様は連れ戻してくるさ。」

「……。」

映司はエクレの説得に黙り込む。

「行くぞ！勇者！」

「え？あ、うん……」

エクレに促されたシンクはエクレの後を追う。だがシンクは何だかもやもやした思いが残った。

映司は1人そこに取り残された。

一一一一一

場所は変わり、ミオン砦のある一室。

誘拐されたミルヒは現在ここにいた。

だがその部屋はかなり豪華な部屋だった。広々した室内、高級なソファー、赤い絨毯、そして壁には幼い頃のミルヒと現在ガレットの代表領主であるレオンミシエルが描かれた絵が飾ってある。

しかもテーブルの上には、お茶と茶菓子がおいてある。完全に人質の受ける接待ではなかった。

「失礼します。」

「どうぞ。」

数人のメイドが部屋に入ってきた。ミルヒはそれに対してあまり驚かない。さらにメイドの後ろから数匹のライオンのような動物が現れる。

「ヴァノン！お久しぶりです！」

ミルヒがそう呼ぶと、その中で一番大きい身体を持った動物が近づく。

そのままミルヒはそのヴァノンをなで始める。

「ありがとうルージュ。」

「いえ。その子ども達はついこの間生まれただけなんです。良

かったら遊んであげて下さい。」

すると、ミルヒの周りに小さい動物が集まる。

「今ガウル様を呼んでまいりますので、少々お待ち下さい。」

「はい。」

そう言うところとルージュと数人のメイドは部屋を出て行った。

――――

再び場所は変わり、ミオン砦に通じる街道。

ここを3匹のセルクが走っている。

その3匹のセルクにはそれぞれシンク、エクレ、リコッタが乗っている。

「ミオン砦まではもうすぐであります。」

リコッタが2人に言う。

「分かった。聞いているか勇者？」

「聞いているよ。」

エクレの問いに答えるシンク。

「何か言いたそうだな。」

エクレがそう言うと、

「・・・エクレ、リコごめん僕が宣戦布告の事を知らないばかりにこんな事に。でも・・・絶対に姫様を助けてみせる！そしてコンサートにも間に合わせてみせる！」

「ふん、当然だ。」

「当然であります！」

シンクの意気込みにエクレとリコッタは勿論と返す。

「それと、エクレ。」

「何だ勇者？」

今度はシンクがエクレに質問する。

「その・・・本当によかったの？映司さんの事・・・。」

どうやら先ほどの映司についてのようだ。

「ああ、映司には確かに不思議な力がある。はっきり言って私より強い。いてもらった方がいい。」

「だったなら何で・・・。」

「さっきも言ったが、映司は望んでここに來た訳じゃない。我々の勇者召喚に巻き込まれただけだ。それに、映司は普通の人と戦う事に抵抗があるんだ。前線にだす事は出来ない。」

「・・・。」

エクレの答えるに黙り込むシンク。

「だから・・・その分まで、我々が戦うんだ！」

「・・・分かったよ、エクレ。」

エクレの意気込みにシンクも納得する。

「・・・見えたぞ。ミオン砦だ。」

「あれが・・・」

遂に、ミオン砦を目視で確認する。

「それでは2人共、また後であります！」

「ああ、頼んだぞリコ。」

「了解であります！」

リコは作戦の為、右手の森へと向かった。そして、シンクとエクレはそのままミオン砦へと向かった。

— — — — —

フィリアンノ城は騒がしくなっていた。

ミオン砦に遠征に向かう騎士団の騎士達で溢れかえっている。

その中に火野映司はいた。

（俺って・・・何なのかな・・・。）

心の中でそんな事を考える。

（確かに、このフロニャルドには望んで来たわけじゃない。でも・・・。）

映司はポケットの中からあるものを取り出す。

それは、かつての相棒の片身である割れたタカメダルだった。

（アंक・・・俺は・・・どうすればいい・・・。）

メダルを握りしめる映司。その時・・・

『そんなのはお前が一番分かっているだろ、映司。』

「・・・アंक？」

映司の頭の中に、今は亡き相棒の声が聞こえた。

『映司。お前がしたい事はもう気づいているんじゃないか？お前自身がな。』

（俺の・・・したい事・・・。）

『ああ、後はその為に何をすべきか考えろ。そして自分の思い、自分の欲望に従え。そうすれば道は見えるはずだ。』

そう言い残すとアंकの声は聞こえなくなった。

「俺の欲望・・・か。」

そう言うと映司はタカメダルをポケットにしまう。

そして目の前に見慣れた自動販売機を発見する。

「俺の欲望、思いは！」

映司は走り出した。そして騎士団長であるロランがいるコンサート会場に向かった。

開戦と思いと自由騎士（前書き）

第14話です。

何かグダグダになった気がする・・・

開戦と思いと自由騎士

ミオン砦の正面門。ここには大量のガレット兵士がいた。

その兵士達は来るべき敵に備え、待機していた。

「・・・」

誰1人として無駄口をする者はいない。辺りを風が吹く音しかない。

「・・・来たぞ！」

兵士の1人が叫んだ。するとそれを待っていたとばかりに兵士達が立ち上がる。

「数は？」

「数は・・・2人です！」

「2人だと？なめられたものだな。」

兵士達の隊長らしき人物が呟く。

「たかが2人、ここで返り討ちにしてくれる！全員構え！」

兵士達は各々の武器を構える。

「来たぞ！」

「よし！全員攻撃開s「おい！あれ！」なんだ！？」

突然兵士の1人が空を指差す。そして・・・大量の砲弾が飛んできた。

「ほ、砲撃だと！？」

「全員退避！退避！」

退避命令を出すのが時既に遅く・・・

退避の砲弾は兵士達の元に降り注いだ。

「「ぎやあああああ！」」

砲撃を受けた兵士達は次々とけものだまに変わっていく。

「ば、ばかn「そこ！」うぎやあああ！」

隊長らしき人物もダガーを使う少女に斬られ、けものだまに変わった。

「すごいねこれ！」

棒を持った少年、シンクが言う。

「当然だ。リコだからな。」

ダガーを持った少女、エクレがそれに答える。

「よし・・・突入するぞ！」

「了解、エクレ！」

シンクとエクレは開いた門を抜け、砦内部に突入した。

・ ・ ・ ・ ・

ミオン砦から少し離れた森の中、ここに1人の少女、リコッタがいた。

彼女の周りには、おびただしい数の大砲があった。

「ビスコッティ共和国王立学術研究院主席、リコッタ・エルマール！」

リコッタは怪しい笑みを浮かべる。

「戦では、砲撃を担当していますであります。」

リコッタはパチンと指を鳴らす。

再び砲撃が開始された。

――――

ビスコッティ共和国にあるミルヒのコンサート会場の舞台裏。

「これでよし。ちゃんとお前の主に届けるんだぞ。」

「ワン！」

そう言われた犬は、首輪に巻物を挟み、コンサート会場から出て行った。

それを、ビスコッティ騎士団騎士団長のロランは見送った。

「ロラン騎士団長・・・」

横にいた、アメリカタが不安そうに呟く。

「大丈夫だ。勇者殿やエクレを信じよう。それに、ダルキアン卿やパネトーネ筆頭も加勢する。きっとやってくれるさ。」

ロランが安心させるように呟く。

「失礼します！」

「どうした？」

突然騎士の1人が現れる。

「はい。ロラン騎士団長に会いたいと言う人物がいます。」

「一体誰ですか？こんな時に・・・」

アメリカタは若干切れ気味に言う。

「はい。火野映司という人物です。」

「映司殿が？」

「はい。」

「・・・分かった。ここに連れて来てくれ。」

「はっ！」

ロランの命令によって騎士は映司の元に行く。

「火野映司・・・確か勇者召喚に巻き込まれたっていう・・・。」

「そうだ。しかし一体どうしたんだ？」

「ロランさん！」

ロランの元に道を通された映司が現れる。

「ロランさん！俺も行かせて下さい！」

「・・・やはりな。」

「えっ？」

映司はロランの発見に驚く。

「来るとは思っていたよ映司殿。しかし今回は・・・」

「お断りします。」

ロランの言葉を全て聞く前に映司は否定した。

「ロランさんは、『今回は我々に任せてくれ。』って言うんでしょ？」

「・・・。」

ロランは言う事を見透かせれ黙り込む。

「確かに、今回はビスコッティの問題かも知れませんが。俺を巻き込みたくないと言うのも分かります。でも、俺は行きます。俺の思い・・・俺個人の意志で戦います。」

「しかし・・・。」

「お願いします！俺はエクレちゃんやシンク君・・・いや俺の仲間の為に戦いたい！それが今の俺の願い・・・欲望です！」

映司の訴えを黙って聞くロラン。

そして・・・

「・・・映司殿。これを。」

ロランはミオン砦までの地図と巻物を映司に渡す。

「映司殿。君の思い、受け取った。エクレ達を頼む。それと、向こうに行ったらブリオツシュ・ダルキアンと言う人物に巻物を渡してくれ。映司殿の事が書いてある。」

「はい！」

映司は地図と巻物を受け取る。

「今セルクを準備させる。ちょっとm「あつ、それなら問題ないです。」？」

セルクは必要ないと言う映司。

「俺の愛機って言うのかな？それがあつたので大丈夫です。」

「そうか・・・。」

「それじゃ・・・行ってきます！」

そのまま映司は走ってその場を後にした。

「良かったのですか？ロラン騎士団長。」

アメリカタが質問する。

「ああ・・・映司殿の覚悟は本物だ。それに・・・」

「それに？」

「さっきの映司殿の眼は・・・いくつもの修羅場をくぐり抜けて来た戦士の眼だった。」

ロランは先ほどの映司の眼を思い返していた。

覚悟と戦士としての炎が灯った映司の眼を・・・

・
・
・

映司はある場所に向かって走っていた。

「確かここら辺に・・・あった！」

お目当ての物を見つけた映司。
しかし、周りには人集りが・・・

「何だあ、これ？」

「さあ・・・？」

「誰だよ。こんなの置いたのは・・・。」

集まっていた人物が口々に呟く。

「すみません！どいて下さい！」

映司はそんな関係ないとばかりにその人集りに向かって叫ぶ。

人集りは映司の叫びを聞き“それ”から離れる。

映司は“それ”の前に立つとポケットから銀色のメダル、セルメダルを取り出す。そしてセルメダルを“それ”のコイン投入口に入れる。そして中心のボタンを押した。

すると、“それ”は変形を始めた。

「うお！？な、何だ！？」

「なんか変形してるぞ！？」

人集りが何か言っているが映司は気にしない。

そして、“それ”・・・ライドベンダーはベンダーモードからバイクモードに変形を完了する。

映司はライドベンダーにまたがり、ヘルメットを被る。そしてエンジンに火を入れる。

ブオオオオオン！

辺りに爆音が響き渡る。

人集りは更に驚く。

「すみません！急ぐので！」

映司は人集りに向かって叫び、そのままライドベンドを発進させた。

映司を乗せたライドベンドはミオン砦に向かって突き進み始めた。

――――

ミオン砦内部。ここでは今まさに激戦が繰り広げられていた。

その中で、シンクとエクレはある人物と遭遇してしまった。

「貴様が勇者か！そっちは親衛隊隊長だな？どっちでもいいからかってこい！」

ガレット獅子団の戦士団將軍である、ゴドウィンと遭遇してしまったのだ。

「どうする？エクレ？」

シンクがエクレにどうするか訪ねる。

実際に今シンクとエクレはピンチである。先ほどまで行われていたリコッタによる砲撃も止まっている。エクレ曰く、包囲されたとの

事。

しかも、この將軍かなり強い。声も洪いが。

（こうなったら・・・勇者だけでも。）

（こうなったら・・・エクレだけでも。）

「『勇者！（エクレ！）ここは私（僕）に任せて先に行け！』」

・・・おもいきり被った。

「何を言っている勇者！お前が行け！」

「女の子にここは任せられないよ！それにエクレの方が砦に詳しいでしょ！」

互いに意見が被り口論を始める。

ゴドウィンはイライラし始める。

「勇者が行け！」

「エクレが行ってよ！」

「いや勇者が行け！」

「いやエクレが行ってよ！」

口論は激しくなるばかりである。

「ぶるあああああああああ！」

遂にゴドウィンがきれた。

「「ひい！」」

「この土壇場で、楽しいやりとりしてんじゃねえ！」

ゴドウィンは2人に向けて、斧を振ろうとした。

ガキーン！

その時、シンク、エクレとゴドウィンの間に刀が突き刺さった。

「え！？な、何！？」

シンクは突然の出来事に同様する。

「この剣は・・・まさか！」

エクレが驚いていると・・・。

「お話の途中申し訳ないでござる。」

突然声が聞こえた。声がした先には・・・。

「ダルキアン卿！」

エクレが歓喜の声を上げた。

「おゝエクレール、お久しぶりでござる。大きくなったでござるな
ゝ。」

「はい！」

エクレーとダルキアンがそんな会話をしていると、シンクがある事に
気づいた。

「はっ！後ろ！」

シンクが叫ぶと、ダルキアンは腰の刀に手をかける。

「紋章剣・裂空一文字。」

そう言う刀を一気に引き抜いた。すると、後ろの塔がまるでバタ
ーのように斬れた。

「す、すごい！」

「いやゝ助かったでござるよ勇者殿。」

ダルキアンは屋根から飛び上がると、シンクとエクレーの前に着地す
る。

「ここは、拙者に任せて先に行くでござるよ。」

「ありがとうございます。ダルキアン卿。行くぞ！勇者！」

「あ、うん！ありがとうございます！」

シンクとエクレはさらに砦内部に向かった。

「ダルキアン・・・だと？」

「そちらとは初対面でござるな。」

ダルキアンは刺さった剣を引き抜いた。

「拙者はビスコッティ騎士団自由騎士隠密部隊頭領、ブリオツシュ・ダルキアンと言う。いざ・・・尋常に勝負でござるよ。」

ダルキアンは刀をゴドウィンに向けて言い放った。

筆頭と激化と蘇る炎のコンボ（前書き）

第15話です。

今回は長め？ かもしれません

筆頭と激化と蘇る炎のコンボ

ミオン砦へと続く街道。

この道をものすごい速さで駆け抜ける影が一つ。普通のセルクではまず出せない速さである。そして、それはセルクではなく、シンクや映司の世界で流通している“バイク”と言う物である。無論フロニヤルドには存在しない

「よし。もうすぐだ。」

そのバイク、ライドベンダーを操る映司はミオン砦を目指していた。

自分の仲間を助ける為に・・・

――
――
――
――
――

ミオン砦の外部。今ここには大量のガレット兵のけものだまが転がっていた。

「ふう・・・ざっとこんなもんでござるか・・・。」

その中で、黄色の髪を持ち狐のような耳と尻尾を持った女性がいた。忍者のような服装をしている。

今ここに転がっているけものだまを量産した張本人である。

「い、この野郎・・・」

まだ動ける兵士達の指令が苦虫を噛んだような顔をする。

「自己紹介がまだだったでござるな。拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユク「でやあああああ！」おっと！」

自己紹介を終える前に指令らしき兵に攻撃されるが、女性は軽くよける。

「せめて最後まで名乗らせて欲しいでござるよ。」

女性はちよつと不機嫌そうに言う。

「このっ！」

「紋章拳・狐流蓮華昇！」

女性は紋章拳を発動させた。そして指令らしき兵は紋章拳を受けけものだまに変わった。

「拙者、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネでござる。にん♪」

女性、ユキカゼは自己紹介を全て言えたようだ。

「ユツキー〜！」

「おお！リコ！どうだったでござるか？」

「花火をいっぱい持ってきたであります♪」

リコッタの両手には、袋に入った花火があった。

しかし、何故ここにリコッタがいるのか？

実は、砲撃最中にリコッタは敵に捕まったのだがユキカゼによって助けられたれていたのだ。

「では、行くでござるか？」

「はい！であります！」

そう言うと、ユキカゼは背中にリコッタを背負う。

そして、一気に飛び上がった。

一気に飛び上がったユキカゼとリコッタはミオン砦の上空へ。そして、その真下にミオン砦内部の戦闘が繰り広げられているのが見えた。

「行くでござるよりコ！」

「了解でありますユッキー！」

2人はそう言うと、互いに拳を軽くつける。するとそこに、2人の紋章が現れる。

「「リコッタ&ユキカゼ式砲撃術！」」

2人はそのまま、袋に入った花火を真下に投下した。

「あ？何だ？」

ガレット兵が花火に気づいた。

しかしこれは、ただの花火ではない。すでに発火していた。

ドオン×無数

「「「うぎゃあああああ！」」「」」

花火は爆発し、下にいたガレット兵達はあっという間にけものだまになった。

「やったであります！」

「やったでござるな！」

2人は砲撃が成功した事を喜んだ。

使われたのは花火の為、辺りには綺麗な模様が浮かんでいた。

・ ・ ・ ・ ・

その頃、シンクとエクレもそれぞれの敵と遭遇していた。

エクレは、ミルヒを誘拐した張本人にであり、ガウル直属の親衛隊であるジェノワーズと対峙した。

「あら？あなたはビスコッティの親衛隊隊長じゃない？」

「あ、ほんまや！」

「本当だ……。」

上からベール、ジョーヌ、ノワールが言う。

「よりにもよって、貴様達か……。」

エクレはダガーを構える。

「これって、親衛隊VS親衛隊じゃない？」

「確かにそうやな！まあ、負ける気しないんやけどな！」

「だって3VS1だし……。」

3人は余裕の表情を見せる。

「そんなのは関係ない……お前達を倒して勇者援護に行かなくてはならないからな！」

エクレはダガーを構え、紋章を出現させるのだった。

一方シンクは・・・

「よお！お前が勇者か！」

「くっ！」

ガウルと遭遇していた。

「おっと。名乗り忘れたな！俺は・・・」

「でやあ！」

シンクはガウルが名乗り終わる前にパラディオン（棒）を振るう。

ガウルは壁にあった槍でそれを防ぐ。

「はあっ！名乗りもさせてくれないか！」

「急いでいるんでね！」

シンクとガウルはつばぜり合いになる。

「姫様は返してもらおうよ！」

「はあっ！やってみろ！」

シンクとガウル。似た者同士の戦いが始まる・・・

そして、それぞれの者達が戦っている中、あの男も着々とミオン砦

に近づいていた・・・

――――

「見えた！ミオン砦だ！」

遂に、映司はミオン砦を目視出来る場所まで来た。

「よし。このまま・・・。」

映司はアクセルを全開にした。更にスピードが上がる。

ライドベンダーのエンジン音に気づいたのか、ガレット兵が大量に現れるが・・・

「お、おい何だあれ！凄いスピードだぞ！」

「セルクじゃない？何だ！？」

驚くガレット兵達

映司はそのままガレット兵達の元に突っ込んだ。

その結果・・・

「」「」「うぎゃあああああ！」」「」

ガレット兵は次々とけものだまに変わった。しかもものすごい勢いの為、軽く吹っ飛びながら。

「よし。このまま！」

遂に映司はミオン砦に突入した。

ダルキアンとゴドウインの戦いは平行線をたどっていた。と言っても今はダルキアン優勢である。

「なかなかやるでござるな。」

ダルキアンはまだ余裕である。

「このお・・・。」

ゴドウインは押されている為か、不機嫌そうな表情になっている。
すると、

「「「うぎゃあああああ！」」「」」

「あっ？何だ？」

「ん？なんでござるか？」

無数の悲鳴が聞こえた為、ゴドウィンは悲鳴がした方を向く。ダルキアンもつられて同じ方を見る。

すると、大量のけものだまが飛んできた。

「・・・。」

「・・・。」

突然の事に黙る2人。

更に、2人めがけてに見たことのないものが走ってきた。

それは、ダルキアンとゴドウィン前で止まる。

「今度は何だ？」

「さあ？」

わけが分からない2人。

それには見た目からして男が乗っていた。男は被っていたヘルメツトを脱いだ。

「ほう・・・なかなかイケメンでござるな。」

ダルキアンは男を見た感想を呟く。

「すいません！ブリオツシュ・ダルキアンと言う方はどちらですか

「？」

どうやら男はダルキアンを探しているようだ。

「拙者だが？」

「すみません！これを！」

男はダルキアンに巻物を投げる

ダルキアンは刀を鞘に戻し巻物を受け取る。そして中身の文章を確認する。

「・・・なるほど。おぬしは我々の見方か。」

「はい！俺は火野映司と言います！」

ダルキアンの言葉に返事をする映司。

「そうか。では火野殿、頼みがあるのだが良いでござるか？」

「何ですか？」

「この先でエクレールが戦闘しているでござる。その救援に行っ
てはござらんか？」

「エクレちゃんが！？分かりました！」

映司はこの頼みを了承する。

「では、頼んだでござる。」

「了解です！」

映司はライドベンダーのエンジンを再び入れエクレの元に向かうとした。

「行かせるかよ！」

ゴドウィンが鉄球を投げるが、

「おぬしの相手は拙者でござる。」

ダルキアンが刀を抜き、鉄球を弾く。

「火野殿、行くでござる。」

「ありがとうございます！」

映司はライドベンダーを発進させ、さらなる砦内部へと向かった。

「ぐぬぬうう！」

「さあ、勝負の続きでござるよ。」

ダルキアンは再び刀をゴドウィンに向けた。

・
・
・
・

・
エクレは苦戦をしいられていた。

3VS1からして不利だが、もう一つ問題があった。

（くそ・・・まだ、映司との戦いの疲れがとれてないのか！？）

エクレを苦戦させていたもの・・・それは疲労だった。

映司との戦いは想像以上に疲れが溜まっていたらしく、今はかなり苦しい状態だった。

「なんや。ビスコッティの親衛隊隊長って案外弱いんやな。」

「なんか期待はずれだな。」

「楽しくない。」

ジェノワーズの3人が口々に呟く。

「っ！この！」

エクレはジェノワーズの1人であるノワールに斬り掛かるが・・・

「せいや！」

「！？」

横からジョーヌが、巨大な斧を振るった。

エクレはとっさの判断でダガーを使いガードするが・・・

「ぐあ！」

踏ん張りが利かず、そのまま壁に激突する。

「楽勝、楽勝！」

「さてと。そろそろ決めちゃう？」

「そうだね。」

エクレにジェノワーズが迫る。

エクレは立ち上がろうとするが、

（・・・駄目だ。力が入らない・・・）

力が入らず立つ事ができない。

その間にもジェノワーズが迫ってくる。

（私は・・・こんな所で終わるのか・・・くそ！）

エクレは必死に立ち上がろうとする。

しかし、どうやっても立つ事は無理だった。

(・・・ここまでか・・・)

エクレは敗北を覚悟した。

その時。

「きゃあ！な、何！？」

「うあ！な、なんや！？」

「何にこれ！？」

突然ジェノワーズが騒ぎ始める。

「一体・・・何だ？」

エクレは顔をジェノワーズに向ける。

そこには、小さい何かに集られているジェノワーズがいた。

(あれは一体・・・)

エクレが疑問に思っていると、黒い何かがエクレとジェノワーズの間に止まった。黒いそれには人が乗っており、乗っていた人はヘルメットを外し、黒いそれから降りた。そしてエクレの元に駆け寄った。

「エクレちゃん！大丈夫！？」

「え、映司！？」

その人物は、ここにはいないはずの映司であった。

「映司どうして!？」

「ダルキアンさんに教えてもらったんだ。この先でエクレちゃんが戦ってるって。」

「そうじゃない! どうしてミオン砦に来た!」

「どうやらエクレは、映司がここに来た理由が知りたいらしい。」

「それはエクレちゃん達を助ける為だよ。」

「私は来るなど言っただけだ!」

「確かにそうだね。でも、エクレちゃんやシンク君達だけを戦わせて俺だけ見学なんて出来ないよ。」

「しかし・・・」

「それに・・・俺はもう迷わない。」

映司はポケットから3枚のコアメダルを取り出す。

「だから大丈夫。俺に任せて。」

「映司・・・すまない。」

エクレは映司にこの戦いを託してみる事にした。

映司はエクレを壁に寄りかからせる。そしてジェノワーズの方を向く

「あゝ鬱陶しかった。」

「ほんまやな！ってあれ？1人増えてる！？」

「本当だ・・・しかも結構イケメン。」

ジェノワーズは先ほど集っていた物、カンドロイドを蹴散らしたが、ここでやっと映司の存在に気がついた。

ちなみにノワールだけ他の2人とずれた感想を口にした。

「ここからは俺が相手をするよ。」

映司がそう言う・・・

「本気で言ってるの？」

「そうやで。大した武器も持ってへんのに。」

「・・・やっぱりイケメンだな・・・」

やはりノワールだけはずれていた。

「いや、力ならあるよ。」

「」「？」

この発言にジェノワーズが首を傾げる。

映司はオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。そしてタカ、クジャク、コンドルのコアメダルをドライバーにセットする。セットを終えるとドライバーを斜めに傾ける。

映司はオーズキャナーを右手で持つ。

辺りに電子音が鳴り響く。

そしてオーズキャナーでドライバーにセットされたメダルをスキヤンした。

「変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！　タ~~~~ジャ~~~~ドル~~~~！！
！！》

タカ、クジャク、コンドルのエフェクトが一つになり映司に重なる。

映司に重なると体から炎が吹き出す。
吹き出した炎を映司は振り払った。

そこにいたのは・・・

「え？」

「な、何や？」

「わお。」

ジェノワーズが驚く。

「映司・・・その姿は・・・一体。」

エクレも同様に驚いていた。

何故なら、そこにいたのはかつてエクレが戦った姿とは違っていただけだった。

タカヘッドは、タカヘッド・ブレイブへ。

オーラングサークルの図柄も3つが一つとなった不死鳥になっていた。

「言ったでしょ？エクレちゃん。俺はもう迷わないって。」

映司、否オーズは振り向いてエクレに言った。

今ここに、本当の力を取り戻した仮面ライダーオーズの炎のコンボ、タジャドルコンボが姿を現した。

飛翔と閣下と偉大なる王鳥（前書き）

第16話です。

今回は短めです。

飛翔と閣下と偉大なる王鳥

未だに激戦が繰り広げられているミオン砦。

その内の一つであるジェノワーズとエクレールの親衛隊対決はある局面を迎えていた。

最初こそ互角だったが、エクレールの3連戦などの疲労などもあり、ジェノワーズが優勢であった。

しかし増援が現れた。その人物の名は火野映司。火野映司は迷いを振り払い今、本来の不死鳥へと姿を変えた……。

「す、姿が……」

「変わりおった。」

「……かっこいい。」

ジェノワーズは目の前で起こった出来事に目を丸くしていた。

「ちょっとまって！何でノワは外見の格好の感想を！？」

「そうや！さっきもあの男をイケメンとか、イケメンとか言ってたやないか！」

「え？だって本当の事だし……はつきり言ってガウ様よりイケメ

ンだし。」

やはりこの3人は馬鹿であった。

「よし。この感覚は何時もどうりだ。力が溢れてくる。」

映司は確かにタジャドルコンボの力を感じ取っていた。

「はあっ！」

オーズは背中にクジャクの尾羽を模したクジャクフェザーを展開させる。

「「「え？」」」

ノワールの発言で口論になっていたジェノワーズもクジャクフェザーの展開に気づいた。

「せいや！」

オーズが力を込めると、クジャクフェザーは一枚一枚に分かれ、羽手裏剣としてジェノワーズに向かって行った。

「くっ！」

ジェノワーズはとっさの気転でジョーヌが斧を盾にし、その後ろにバールとノワールが隠れる事により羽手裏剣をガードする。

「はあ！」

オーズはその間にクジャクウイングを展開し、大空へと舞い上がる。

「と、飛んだ!？」

これには、エクレも驚いた。

オーズは飛翔しながらドライバーにセットされたタカ、クジャク、コンドルを抜き取る。そしてタジャスピナーのスペリオルシールドを開き、中にあったセルメダルの内、3枚を取り出す。そしてタカ、クジャク、コンドルを抜き出した場所に置き、スペリオルシールドを閉じる。オースキャナーを右手で持ち、タジャスピナーにあるメダルをスキャンする。

《タカ!クジャク!コンドル!ギン!ギン!ギン!ギン!・・・ギガスキャン!》

タカ、クジャク、コンドルを使用しギガスキャンを行う。

すると、オーズは炎の鳥を纏う。

タジャドルコンボの必殺技の一つである〈マグナブレイズ〉である。

「ねえ・・・あれ・・・」

「ちょ!あれはまずいやろ!」

「かっこいい!」

慌てるベールとジョーヌ。だが、ノワールは目を輝かせていた。

オーズはジェノワーズに向かって一気に滑空を始める。

「「こ、こつちきたああああ！」」

「おおー！！」

ノワールは更に目を輝かせる。

ベールとジョーヌは抱き合い悲鳴を上げた。

そして、

「せいやあああああ！！！！」

「「うわあああああああ！」」

オーズはジェノワーズに向かって突撃した。

ジェノワーズはオーズの纏った炎の鳥に巻き込まれ大爆発を起こした。

「す、すごい・・・これが・・・映司の・・・本当の力・・・。」

エクレは圧倒される

そして爆煙からオーズが飛翔しながら現れ、エクレの前に降り立った。

「映司・・・。」

「何とか終わったよ。」

オーズはエクレに話しかける。

爆煙が晴れそこには服が焼け、下着だけとなり気絶したジェノワーズだった。

「立てる？」

オーズはエクレに手を差し伸べる。

「ああ、すまない。」

エクレはオーズの手を取ろうとした。

「何者だ。貴様・・・。」

突然背後から声が聞こえた。

オーズとエクレは声がした方向を向いた。

そこにいたのは・・・

「あ、あなたは・・・レオ閣下!？」

「・・・閣下？」

声の主は、ガレット獅子団代表領主であるレオンミシエルであった。

隣にはゴドウィンもいる

「何故レオ閣下がここに・・・」

「ちとガウルに用があつてな。」

レオはガウルに用があるようだ。

「ねえエクレちゃん。この人誰？」

オーズはレオなど知らないのでエクレに質問するが・・・

「映司！立場をわきまえろ！このお方はガレット獅子団の代表領主であるレオンミシエル閣下だぞ！」

エクレに怒られてしまった。

「ガレットって確か・・・ビスコッティの隣国の？って・・・代表領主！？」

「おい、そこ赤鳥。」

驚くオーズだが、レオはオーズを呼んだ。

「確認するぞ。ジェノワーズを“一瞬”で倒したのはお前か？」

「え？まあ・・・そうですね。」

質問されたオーズは素直に答える。

「やはりな・・・面白い！」

突然レオは持ってきた斧を構える。ゴドウィンも同様に構える。

「え？」

「ジェノワーズは馬鹿とは言え、実力は本物だ。その3人を一瞬で倒したその実力・・・我々に見せてみる！」

レオはどこか楽しそうである。

「・・・。」

オーズはしばらく黙る。

そして・・・。

「分かりました。相手になります。」

逃げれないと悟ったオーズは戦う覚悟を決める。

「映司・・・。」

エクレは心配そうに呟く。

「大丈夫。俺は・・・勝つ！」

オーズはタジャスピナーを構える。

オーズVSレオ&ゴドウィン。

偉大なる王鳥と閣下＋１の戦いが始まる。

奮戦と桁違いと灼熱の力（前書き）

第17話です。

今思ったらまだこの物語まだ1日もたっていない・・・

奮戦と桁違いと灼熱の力

「でや！」

「ふん！」

レオの斧とオーズのタジャスピナーがぶつかる。

「ほう・・・なかなかの強固な盾だな。」

「それはどうも！」

レオはタジャスピナーの強度に感心する。

オーズはクジャクウイングを展開し、後ろに向かって飛び上がる。

「空も飛べるのか！面白い！」

レオは本気でこの戦いを楽しんでいた。

「はあ！」

オーズは空中でクジャクフェザーを展開、羽手裏剣としてレオに飛ばす。

「あまいぞ！」

しかし、レオは斧を自身の目の前で高速で回転させ羽手裏剣をガ―

ドする。

「嘘お！」

「ぶるああああああ！」

「っ！」

クジャクフェザーがガードされ驚くオーズだが、その間にゴドウィンが鉄球を飛ばしてくる。

オーズは鉄球を回避する。

「くらえ！」

「なぬう！」

地面スレスレを飛行しながらゴドウィンに対し、タジャスピナーの火炎弾で応戦する。そしてそのままゴドウィンに接近し・・・

「せいや！」

「ぬおお！」

タジャスピナーに炎を纏わせゴドウィンを殴る

ゴドウィンはガードできずにタジャスピナーの攻撃を受け、後ろに吹き飛ぶ。

「あの武器は盾だけではなく、遠距離も格闘もできるのか！」

レオはタジャスピナーの驚異の性能を見て驚くと同時に興奮する。

「映司……。」

エクレはただ映司を心配した。

「あの人、映司って言うの？」

「ああ……てえ、うわあ！」

エクレの隣に突如としてジェノワーズが現れる。ちなみに下着姿である。

「な、何だお前達起きていたのか。」

「まあな！痛かった……。」

「痛かったよ……。」

ジョーヌとベールがマグナブレイズの威力の感想を述べる。

「で、あの映司って人何者？」

ベールが代表してエクレに質問する。

「あいつは……。」

（話していいのだろうか……。）

エクレは心の中で迷う。

「何者なの？そしてあの姿は何？」

「てえ、近い近い！」

ノワールが目を輝かせてエクレに訪ねる。

「ごめんな。さっきからノワがこんな調子なんよ。」

ジョーヌはエクレに謝罪する。

「そうか……。」

エクレは思わずため息が出た。

「とりあえず……あいつのフルネームは“火野映司”だ。出身は勇者と同じ世界だ。今はこれだけしか教えられん。」

「火野映司……。」

ノワールの目が更に輝いたのだった。

一方でオーズVSレオ・ゴドウインの戦況は……

「ハア……ハア……。」

「なかなかやるな……赤鳥。」

「こいつ・・・しぶといですな閣下・・・。」

2人がかりのレオとゴドウィンに対し、オーズは全く引けを取らない。むしろ、今はオーズ優勢である。

「このままじゃあ・・・決着は着きそうにない。どうすれば・・・。」

映司は必死に考え始めた時・・・。

『おい、映司。』

(アंक!?)

再び頭の中にアंकの声が響きわたる。

『映司。今お前には何が必要だ? 必要な物をイメージしろ。そうすればこの世界の力が一時的に叶えてくれるはずだ。』

(俺が今必要な物・・・。)

『そうだ。強くイメージしろ映司。お前ならできるはずだ。』

そうして再びアंकの声は聞こえなくなった。

「俺に今必要な物・・・。」

映司はイメージする。今この現状を打破できる存在を・・・。

(・・・っ！これだ！)

遂に必要な物を見つける。

「俺に・・・力を！」

映司が空に向かって叫ぶ。

すると・・・

「何だ！？」

オーズの周りの大地から7つの光が飛び出す。その現象に驚くエクレ。

「この力は・・・もしや！？」

「まさか・・・フロニヤ力か！」

レオとゴドウィンは一気に警戒する。

オーズはタジャスピナーのスペリオルシールドを開く。すると7つの光はタジャスピナーに納まる。

そしてスペリオルシールドを閉じ、オースキャナーでタジャスピナーをスキャンする。

《ライオン！トラ！チーター！ライオン！トラ！チーター！ライオン！・・・ギガスキャン！》

タジャスピナーに黄色のエネルギー弾が生成される。そしてそのエネルギー弾は熱を発生させ、やがて灼熱のエネルギー弾となる。

「はあああああ・・・」

オーズはその狙いをレオに定める。

そして・・・

「せいやあああああああ！」

オーズは灼熱のエネルギー弾を発射する。

エネルギー弾は真っ直ぐレオに向かう。

「くっ！」

レオはエネルギー弾を迎撃しようとするが・・・

「っ！？何だこの高熱は！？」

遠くにいながらエネルギー弾の熱を感じ取るレオ。

「迎撃できない！？」

あまりの高熱に近づけない。

気づけばエネルギー弾は近くまで迫っていた。

「っ！しま・・・」

やられる・・・。

そう思った時だった。

「閣下！」

ゴドウィンがレオの前に立つ。

「くうううう！」

エネルギー弾を受け止めるゴドウィンだったが・・・

バキィ！

斧は粉々になった。

「何だと!？」

斧以外に武器はない。という事は・・・

「があああああ！」

エネルギー弾をモロに受けるゴドウィン。そのままエネルギー弾と共に壁に激突した。

「ゴドウィン！」

レオが叫ぶが・・・

壁の下にいたのは・・・普通よりでかいけものだまだった。

「……………」

レオは言葉を失う。

そしてレオはオーズを見る。

エネルギー弾の通った後は高熱により焦げていた。

「なあ……………」

レオの中に恐怖心が生まれる。

（・・・勝てるはずがない・・・奴は・・・化け物か!?!）

レオは心の中で絶叫した。

「嘘・・・将軍が・・・」

「けものだまに……………」

「……………」

ベールとジョーヌはまるで夢でも見ているようだった。
ノワールもさすがに啞然とした。

「あれが・・・迷いを振り切った映司……………」

エクレもまた啞然としていた。

（私と戦った時は・・・一体何だったんだ・・・桁違いじゃないか
！）

エクレはあの時、もし、あの力と戦ったらと思い戦慄したのだった。

休戦と輝力と鉄拳制裁（前書き）

第18話です。

次回は短めになると思います。

休戦と輝力と鉄拳制裁

オーズの放った一撃は、その場にいた者達を驚かせた。

ジェノワーズはやられた事ないゴドウィンがけものだまになったこと。

レオはオーズの放った一撃のあまりの威力に。

エクレは本気のオーズ、否映司の実力を見て・・・

「ちょっとやりすぎたかな・・・。」

オーズは少し後悔する。

やがてレオがオーズを見る。

しかし、その眼は先ほどまでの好戦的な眼ではなく、恐怖を抱いた眼だった。

オーズは何を思ったのか、レオに向かって歩き始める。

「くっ！」

近づいてくるオーズに対し、斧を構えるレオ。

オーズはレオの前に来ると、斧を右手で掴み刃身を下に下げる。

「何の真似だ？ 赤鳥よ。」

「・・・もう、終わりにしませんか？」

「・・・何？」

オーズはレオに対し、休戦を申し出る。

「あなたがここに来たのは、俺と戦う為ではないでしょ？ さっきエクレちゃんとの会話を聞いていましたけど、あなたはガウルって言う人に用があるんでしょ？ だったらもう終わりにしましょうよ。」

「・・・。」

このオーズの言葉に黙り込むレオ。

「それに・・・俺とあなたには元々戦う理由がありません。だから、ねえ？」

「・・・分かった。」

オーズの言葉を受け休戦を申し入れるレオ。

「その前に・・・聞いていいか？」

「何ですか？」

「お前、名前は？」

どうやらレオはオーズの名が知りたいようだ。

「火野映司と言います。」

「火野映司か・・・覚えておくぞ。」

そのままレオはオーズの元を離れる。そして、観戦していたジェノワーズの前に行き・・・

「この・・・馬鹿どもがあああああああああ！」

「「「いやあああああ！」」」

レオはジェノワーズに対し鉄拳制裁を与える。

ゴン！×3

鈍い音がすると野球ボール位の大きさのたんこぶを作り気絶するジェノワーズ。

レオはジェノワーズの首根っこを掴み、壁の前へ。

「・・・はあ！」

レオ渾身の一撃により壁が壊れる。

「「え？」」

そこには、つばぜり合いをしている・・・シンクとガウルがいた。

2人はレオの方を向く。

「あ、姉上？」

「か、閣下？」

冷や汗だらだらな2人。

「戦場は遊び場じゃない！この・・・ガキどもがあああああああああ
ああ！」

「「ひいひいひい！」」

この後シンクとガウルはジェノワーズと同じ運命をたどった。（ちなみに気絶はしなかった。）

「うあ・・・痛いよあれは。可哀相に・・・。」

ジェノワーズ及びシンクとガウルが鉄拳制裁を受けていた光景を見ていたオーズは思わず言葉を漏らす。

「さてと・・・。」

オーズはレオの行った方向ではなく、エクレがいる方向に行く。

「まあ・・・何だ・・・お疲れ様。」

「ありがとうエクレちゃん。」

エクレはオーズに労いの言葉をかける。

「ん？おい映司。」

「何？」

「盾が光っているぞ。」

「え？」

盾が光っていると言われ、タジャスピナーを見るオーズ。確かにタジャスピナーは黄色く輝いていた。

「何だろう……。」

オーズはタジャスピナーのスペリオルシールドを開ける。

すると……。

ピキン。×7

タジャスピナーに納められていた7枚の猫系のコアメダルは音を立て割れた。

「1回きりか……。」

あくまでもこのメダルは一時的な物らしい。オーズは理解した。

「ふう……。」

オーズは一息入れ、オーズドライバーを水平にし変身を解除する。そして仮面ライダーオーズから元の火野映司の姿に戻った。

「・・・あれ？」

「どうした？」

映司は再び違和感を感じた。

「いや・・・普通あの姿になると疲れがドツと出るんだけど・・・その疲れがないんだよ。」

映司の感じた違和感。それはオーズのコンボ使用後に現れる急激な疲労がなかった事である。

「なるほど・・・だが私に言われてもな・・・。」

「そうだよね。ごめんごめん。」

とりあえず、この問題は後回しにする。

「それよりも、姫様の所に行かなくては・・・。」

エクレは本来の目的を思い出し口にする。

「そうだった！コンサートが！」

映司も思い出す。

「早く行かなくては・・・くっ！」

エクレは立ち上がるがもうふらふらである。

「大丈夫？」

「くそ・・・疲労さえなければ・・・。」

今思えばエクレは今日1日だけで3連戦している。その分の疲労がありもはや立つ事がやっとであった。

「でも医務室で休んでたよね？」

「あの時は映司のパンツ講座のせいで休めなかったんだ！」

「うっ・・・ごめん。」

確かにエクレは最初にオーズとの戦闘後医務室にいたが、映司がシンクに対して開いたパンツ講座のせいで休めなかったのだ。おまけに兄も参加していた。

「うーん・・・そうだ！エクレちゃんまた背負って行くよ！」

「いやそれは駄目だ。」

映司の提案は却下された。

「何で？」

ここはミルヒのいた応接室。

現在大半のメンバーはここにいた。ちなみにレオ閣下は帰ってしま
いダルキアン、ユキカゼは外にいる。

「そういえばエクレはどこでありますか？」

リコッタがエクレがいらないと言い出す。

「そういえば見てないね。どこ行ったんだろ・・・。」

シンクも同様の反応。

「とりあえず！どうやったらこの状況を打破できるか考えてくれ！」

ガウルの言葉に皆はどうすべきか考え始める。

沈黙が部屋を支配する・・・

だが、この沈黙はある男によって破られる。

「失礼しまゝす・・・。」

誰かが部屋に入ってきた。

「この声って・・・まさか・・・。」

シンクはまさかと思い入り口を見る。

そこには・・・。

「あ、シンク君久しぶり！」

「映司さん！」

映司がいた。しかも。

「エクレ・・・なにしてるの？」

「う、うるさい！み、見るな！／＼／＼。」

シンクは驚いた。何故なら・・・

エクレが映司にお姫様抱っこをされていたからである。

「あ！エクレであります！て・・・あれ？」

「ほう・・・これは・・・。」

「映司さん・・・まさかですね。」

リコッタ、ガウル、ミルヒが順番に感想を口にする。

「うう・・・み、見ないでくれ・・・。」

軽く涙目になるエクレ。

「とりあえず・・・ソファアあるかな？」

「あ、ならあそこに。」

「ありがとうございます、姫様。」

ミルヒにソファアを教えてもらいエクレをソファアに下ろす映司。

「これでよしと・・・。」

「あ、あの・・・。」

エクレを下ろした映司にリコッタが近づく。

「君は？」

「初めましてであります。自分はビスコッテウ王立学術研究院主席のリコッタ・エルマールと言っております！」

「よろしく。俺は火野映司。」

互いに自己紹介をする映司とリコッタ。

「それにしても、先ほどのエクレは嬉しそうでありましたな！」

「え？ そうなの？」

リコッタの突然の発言。

「な、何でだ！」

「だってエクレ尻尾がかなりフリフリしていたでありますよ。」

「うう・・・／＼／＼。」

顔が真っ赤になるエクレ。

「ところで姫様。」

「何ですか？映司さん。」

「あの、コンサートの方は・・・。」

映司が質問すると・・・

「」「そうだった！」「」

どうやら映司出現で忘れていたようだ。

「どうする！？後20分切ったぞ！」

ガウルがまた慌て始める。

「ねえエクレ。」

「何だ勇者？」

シンクは何を思ったかエクレに話しかける。

「輝力って運動とかのサポートとかできる？」

「とりあえずできるが・・・どうする気だ？」

「それはね！」

シンクは突然立ち上がる。そしてミルヒを背負う。

「これだよ！」

「・・・何だそれは？」

エクレが疑問を口にする。

「これは勇者超特急だよ！」

「」「勇者超特急？」「」

そこにいたもの全員の声が揃う。

「輝力を使って走力を強化するんだよ！」

「なるほど・・・考えたな勇者。」

エクレは珍しくシンクを褒めた。

「それじゃあ・・・行ってきます！」

「輝力の使い過ぎに注意しろよ。」

「分かった！行きますよ姫様。」

「はい。」

そう言うとシンクは脚に輝力を集中させる。

そして一気に外に向かって飛び出して行った。

尋問と超特急と忍び寄る影（前書き）

第19話です。

最近タジャドルの空中戦を板野サーカスやったらすごくない？と思う今日この頃です。

尋問と超特急と忍び寄る影

シンクがミルヒを背負い、勇者超特急なるものでコンサート会場を目指している頃……。

「さあ、エクレ！さっさと白状するであります！」

「いや……だから……。」

「逃げるのは無しでありますよ！早く映司様との関係を白状するであります！」

現在リコッタによるエクレへの尋問が始まっていた。

「俺はガウル・ガレット・デ・ロワだ！ガウルで良いぜ！」

「俺は火野映司と言います。俺は映司で良いよ。」

「おう！よろしくな映司！」

「よろしくガウル君。」

エクレが尋問されている横では、映司とガウルが自己紹介を済ませていた。

すると横からジェノワーズが現れる。

「私はガウ様直属の親衛隊ジェノワーズの1人ベール・ファールトンと言います。」

「同じくジェノワーズの1人、ジョーヌ・クラフティや！よろしくな！」

「同じくジェノワーズの1人、ノワール・ヴィノカカオ。よろしく映司。」

「よろしくね。」

気絶（嘘）から復帰したジェノワーズとも自己紹介を済ませた映司。

「さあ！白状するであります！」

「だから違うと言っている！」

リコッタに必死に抵抗するエクレ。

「いや！これはきっと何かある！」

まさかのガウル参戦。

「いくら動けなかったとは言え、お姫様抱っこは行きすぎている！これはただならぬ関係に違いない！」

ガウル参戦がジェノワーズにも火を点ける。

「そうですよ！」

「お姫様抱っこなんてうらやましいわ！」

「白状しようか・・・ねえ？」

ベールとジョーヌは明らかに遊び半分だが、ノワールは明らかに違った。背後には黒いオーラが見えたとか見えなかったとか。

この光景を見ていた映司は・・・

「・・・平和だな。」

平和な時と認識していた。

ミルヒのコンサートが始まるまでエクレは質問の嵐を受けるのであった。

—
—
—
—
—

その頃シンクとミルヒはと言うと、もうすぐでコンサート会場に着く所まで来ていた。

現在はパラディオンが変化したスケボー(?) 状のトルネイダーに乗っていた。

「あと、もう少しだ！」

シンクはやつと見えたコンサート会場にテンションが上がる。

「姫様とぼしますよ！ 掴まって下さい！」

「は、はい！」

更に輝力を高めトルネイダーのスピードを上げる。

そのままコンサート会場に向かって飛翔した。

・
・
・

「コンサート開始まで後10分・・・まだか勇者殿。」

コンサート開始の裏方では更に慌ただしくなっていた。

実際にコンサートの開始時間を遅らせるとか、代役を立てるなどの提案があったがそれは、ミルヒのコンサートを楽しみに待っている人々に申し訳ないとして却下されている。

「騎士団長・・・このままでは・・・。」

「大丈夫だ。勇者殿達を信じよう。」アメリカタの言葉にロランが返事をした時だった。

「すみません！ お待たせしました！」

「姫様！」

ミルヒが帰ってきたのだ。

「姫様、お疲れだと思いますがすぐにコンサートの準備に入ります。リハは無しでぶっつけになります。」

「分かりました。急ぎましょう。」

ミルヒは早速準備にとりかかる。

「勇者殿は？」

「輝力の使い過ぎで今はぐったりしています。」

「そうか・・・勇者殿に感謝しなくてはな・・・。」

メイドの報告を聞いたロランはそう呟いた。

「ゼエ・・・ゼエ・・・輝力の使い過ぎて・・・ゼエ・・・こんなに疲れるのか・・・。」

シンクはベンチに倒れ込んでいた。

「・・・姫様は・・・無事につけたかな・・・。」

ミルヒの心配をするシンク。

しばらくすると・・・

「・・・歌が聞こえる。」

歌声が聞こえてきた。どうやらコンサートには間に合ったようだ。

「良かった・・・良い歌だな・・・。」

コンサートが無事に行われた事に安心したシンクは、ミルヒの歌声に耳を傾けるのだった。

――
――
――
――
――

ミルヒのコンサートが定刻どおりに始まった頃。

コンサート会場の近くの路地裏の辺りは静まり返っていた。人影などは一切ない。

そこに1人佇む全身をローブに包んだ謎の人物がいた。その人物の手には2枚の銀色のメダル、セルメダルが握られていた。

その人物は、その内の1枚を上に向かって投げる。さらにもう1枚を親指に乗せ弾く。すると空中でメダルがぶつかる。

ぶつかった瞬間、メダルはどす黒いオーラを出しながら増殖する。やがてそれは異形の怪物になり謎の人物の前に降り立つ。

「・・・お呼びでしょうか、我が主よ。」

異形は謎の人物に跪く。

「命令だ。あのコンサート会場にいるビスコッティ共和国の代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティを誘拐してこい。それが出来なければ・・・抹殺しろ。」

「御意。」

謎の人物は異形に命令する。

異形は命令どおりコンサート会場に向かった。

謎の人物は路地裏の闇に消えた。

不適な笑みを浮かべながら・・・。

異変と乱入とメダルの怪人（前書き）

第20話です。

早くフォーゼ&オーズが見たい！

異変と乱入とメダルの怪人

コンサート会場の正面口。ここに数名の騎士達が警備にあたっていた。

正面口でもミルヒの歌は聞こえてくる為、騎士達に不満はなかった。

「姫様の歌はやっぱりいいな。」

「ああ、心が癒されるよ。」

「これも勇者様のおかげだな。」

騎士達は雑談で盛り上がる。実際警備はしているが、襲ってくる者などいない為こうしてのんびりできる。

「それでさあ・・・ん？」

「どうした？」

「いや・・・あれ。」

騎士の1人が何かに気づき、その場所に指を指す。

「何だあれは？」

「さあ？」

騎士達は気にせず雑談を再開する。

その時だった。

「貴様らの欲望・・・貰うぞ。」

突然声が聞こえ。

「「「はあ？」」」

騎士達が声した方に振り向いた。

ガス！

「！？」

突然騎士の1人が頭を異形の手掴まれる。

「ぐぎがあああああ！」

頭を掴まれた騎士は叫び始める。

騎士からはまるでメダルが互いにぶつかり合う音がした。

しばらくすると音はなくなり、騎士は地面に倒れる。

「お、おい！しっかりしろ！大丈夫か！」

「・・・。」

ようやくこの事態に頭がまわった他の騎士がその騎士に声をかけるが反応がない。目を見るがその目には生気がなかった。

「貴様何者だ！」

「仲間に何をした！」

騎士達が何かに向かって剣を構える。

が。。。

「欲望を吸ってやったまでだ。安心しろ、おまえ達も後を追う。」

異形はそう言うのと騎士達に向かって行った。

コンサート会場の正面口から騎士達の苦痛の叫びがこだました。

・
・
・
・
・

「はぁ・・・本当なら客席で聞いていたんだけどな・・・。」

シンクはベンチに寝そべりながら呟く。

実際この疲労、もといミオン砦の戦いがいなければリラックスしてミルヒのコンサートを聞く事ができたのだ。

「はぁ・・・もったいない。」

シンクからは溜め息混じりに呟く。

「ほう・・・ここにも邪魔がいたか・・・。」

「!?!」

突然声がし、シンクはベンチから飛び起きる。そして声の主を見た。

「な、何だ・・・あれ？」

シンクが見たのは異形だった。

「貴様の欲望も吸い取ってやろう。」

異形がシンクに近づく。

「っ!」

シンクは後退し、パラディオン（棒）を出現させ、それを構える。

「ほう・・・いい度胸だ。」

異形も構える。

「はぁ!」

シンクはパラディオン（棒）を異形に向かって放った。

「甘いな・・・。」

パラディオンは異形の手に掴まれる。

「なあっ！」

「ふん！」

「うがあ！」

異形はシンクを投げ捨てる。投げ捨てられたシンクは床叩きつけられる。

「良いだろう・・・貴様の欲望を吸い尽くすのは後にしてやる。」

異形はそう言うのと再びシンクに襲いかかった。

・
・
・
・
・

一方、ミルヒのコンサートは順調に進んでいた。

今は3曲目が歌い終わった所である。

観客はテンションは最高潮にたっしていた。

ミルヒも観客の期待に応えるべく、4曲目を歌おうとした時。

ドガン！

何かが壊れる音がした。

「な、何？」

ミルヒも驚いたが、観客も啞然としていた。

そして・・・

「があああああ！」

シンクが悲鳴を上げながら転がってきた。

「ゆ、勇者様？」

ミルヒは突然シンクが転がってきた為驚いたが・・・

「勇者様！ち、血が！」

シンクは額から血を流していた。

「姫様さがって！」

シンクはパラディオンを構える。

「案外丈夫なのだな・・・。」

「へえ？」

突然声が聞こえた方を見ると異形が歩いてくる。

「もう少し楽しませろ。ビスコッティの勇者よ。」

異形は歩みを止めずシンクに近づく。

観客は突然の事にポカンとしている。

「姫様早く！」

「させん！」

シンクがミルヒの脱出を促すが、異形は腕から光弾を放ち向かいにあった裏手への入り口を破壊する。

すると、事態を察した観客が外に逃げようとするが、

「あ、開かないぞ！どうなってる！？」

扉が開かず脱出が出来ない。

「一つ言い忘れていたな。扉には細工を施してある。脱出は不可能だ。」

「貴様！」

シンクはパラディオンで殴るがやはりダメージはない。

「もっと楽しませろ。ビスコッティの勇者よ。」

異形はパラディオンをはじく。シンクは後退する。

（どうする・・・輝力使い果たした僕に何ができる・・・いや、やるんだ。僕がやるんだ！）

シンクは再びパラディオンを構えた。

――――

「おい！何だこれは！？」

ミオン砦にもこの事態は放送されていた。

元々コンサートは全国に向けても放送されていた為、ミオン砦も例外ではない。

「こいつは・・・魔物？」

「いや、魔物にしては言語能力がしっかりしすぎや。」

「じゃああれは一体・・・」

エクレ、ジョーヌ、ノワールが順次に呟く。

「あれは・・・。」

映司はなぜか嫌な予感がしていた。

ウホ×3

「ん？」

映司の足元に何かがぶつかる。映司は足元を見ると……

「これは、ゴリラのカンドロイド？……まさか。」

映司はゴリラカンドロイドを手に持ち、画面に映る異形に近づける。近づけた事によりゴリラカンドロイドの反応が強くなる。

「まさか、ヤミー！？」

映司は部屋を飛び出した。

「映司！どこに行く！」

エクレが映司に気づき声をかけるが気づいた時には映司はいなかった。

「こうしちゃあいられねえ！俺達で援護に……って映司は？」

「分からん……突然出て行った。」

その場所にいた者達は映司の素早い行動に驚くのだった。

映司は止めていたライドベンダーに乗りミオン砦を出た。

（何でこの世界にヤミーが……という事はグリードも……。）

映司は思考をめぐらせる。

（とにかく急がないと。シンク君や姫様が危険だ！）

ライドベンダーのアクセルを更に入れ、速度を上げる。

（そういえば……。）

映司はある事を思い出す。

（なんだか、あのヤミーはどことなくカブトガニに似ていたな……
という事は……俺の知らないコアメダルがあるのか？）

映司はそんな事を考えながら、異形 カブトガニヤミーがいるコン
サート会場に向かって行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950y/>

仮面ライダーオーズ/OOO feat. DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

2011年11月27日22時59分発行